Ⅱ　学生の感想レポートに見られる推論をめぐって

1．はじめに

ヒロシマを描いた映画を、現代の学生がどのように見るのだろうか。『ひろしま』で延々と描かれる被爆直後の映像、『原爆の子』で描かれる緊張感がみなぎる様式化された被爆映像、『はだしのゲン』というアニメのなかで描かれる被爆の瞬間の絵など。映画が製作された時代情況など、おそらくはほとんど知らない、いまの学生たちは、いわばこうした“古い”映画とどのように向き合うのだろうか。

私自身、前章で映像それ自体を詳細に読み解いたように、確かにその時代でないと理解するのが困難であるような映像やメッセージが見られるものの、現代においても、こうした映画は十分に見る価値があるものとして考えている。学生たちも、そうした理解をするのか、あるいは、価値のないもの、すでに「賞味期限」が切れた過去の遺産として、その映像を評価するのだろうか。

こうした関心をもち、私は広島国際学院大学現代社会学部の１年生から４年生まで、17名の学生に協力を依頼し、５つの映画（『原爆の子』『ひろしま』『はだしのゲン』『黒い雨』『ゴジラ』（1954年版））を見てもらい、それぞれにつき、2000字程度のレポートを書いてもらった。学生を選んだ基準は、それほど厳格なものではない。当時、私の講義で課したレポートなどを検討し、いわば「自分の言葉」「自分の論理」で、できるだけ論述ができる、と私が判断した学生にお願いしたのである。

当初、５つの映画を見て、各自が好きに映像を読み解くようにと指示したのであるが、書かれたレポートを見ると、やはりそうした映像解読の作業は学生たちにとって、やりづらく難しい作業であったようだ。もし、そうした解読がなされているとすれば、私は、解読のなかにある固有の推論などを取り出し、「ヒロシマ」映画に対する学生たちの解釈のありようを詳細に検討しようと考えていた。しかし、大半のレポートは映画に対する感想というかたちになっており、感想を語りつつ、自らが受けてきた平和学習への批判、いま自らが生きている時代や場所がいかに、「ヒロシマ」から遠くなりつつあるのか、への確認などが書かれていたのである。

こうした学生たちの感想に見られる推論や特徴がどのようなものであるのか。この章では、できるだけ感想の語りを取り出しながら、彼らの語りから湧き出てくる思いや熱が感じられるようにまとめていきたい。

ここで取り上げる感想は『ひろしま』『原爆の子』『はだしのゲン』の３作品をめぐるものにする。それは前章で私なりの映画、映像それ自体の詳細な解読をしていることもあり、より感想の意味が際立ってくると考えたからだ。それと、私自身、意外であったことがあるからだ。

一つは『ゴジラ』（1954年版）への学生たちの解釈である。度重なる原水爆実験の影響で、眠っていた古代生物がよみがえり、東京を襲う。東京を破壊し尽した映像は、さながら大空襲のあと、さらには被爆後の広島を想起させるものだ。ゴジラが東京を襲うことについて心配そうに電車内で男女が語り合う。「また疎開しなければならないのか」「命からがら長崎から逃げてきたのに」など、戦争や原爆を連想させる有名なシーンがある。54年

公開当時、こうしたシーンや語りは、見る側にリアリティの重みを感じさせるものであったはずだ。確かに広島そのものは語られることもないし、被爆の映像も出てこない。しかし私は「ヒロシマ」映画を考えるうえでの基本作品として『ゴジラ』を考え、学生に見てもらったのである。しかし、多くの感想は、なぜ『ゴジラ』が「ヒロシマ」映画に選ばれているのか、わからないし、確かに原水爆実験の影響だということはわかるが、ストーリーの荒唐無稽さが気になり、「ヒロシマ」を考え直したり、反芻できるものではない、というものであった。

なぜ、こうした反応が多かったのか。もちろん『ゴジラ』という映画に対する私自身の思い入れと今の学生たちが当然のように考えている「怪獣映画」への軽い意味づけの違いはある。たとえば感想の中には、いまのゴジラシリーズのように軽く考えていたのに、『ゴジラ』(1954年版)の映像の重さに驚くものがあった。

しかし、そうした世代の違いよりも、私にとって興味深いイシューがそこから見えてくるように思われる。そのイシューとは、学生たちの感想が象徴する「ヒロシマ」理解の作法、枠、領域限定の仕方とでもいえるものだ。なぜ、彼らは『ゴジラ』のような映画を「ヒロシマ」を理解するという作業を進めていくうえで、そぐわない手がかりとして解釈し、自らの「ヒロシマ」理解からはずしていったのか？　そこには、逆に彼らが「ヒロシマ」だとイメージするできごと、世界、そこへ接近する上での道筋などを、彼らなりに限定しつくりあげつつある実践がある。こうした「ヒロシマ」理解という営みを限定していく実践を解読する作業は、今後の課題として、じっくりと考えていきたいと思う。

いま一つは『黒い雨』(今村昌平監督作品)への学生たちの解釈のアンビバレンスである。この作品は井伏鱒二の同名小説の映画化である。そこには黒い雨にうたれているが、直接被爆していないということをなんとか証明し、身内の娘を嫁がせようと懸命になっている主人公の男性の姿が中心に描かれる。彼自身は被爆しているのだが、他にも被爆し原爆症で身体が病んでいる友人が登場し、彼らの日常が淡々と描かれていく。周囲の原爆症への無理解、被爆したことが原因で何度も縁談がこわれていく話など、被爆後、いわば世間が落ち着いていく中で、被爆した人々がどのような現実を生きているのかを描く内容となっている。強引に割り切って言えば、被爆者への差別、排除を訴える映画となるのかもしれない。しかし『黒い雨』では、そうした分かりやすい図式を見る側に押しつけようとはしていないのである。まさに被爆した人々がどう生きているのか。広島のことを世の中が忘れかけ、また原爆を使用しようとする危険性が出てきた時、彼らはどのように思い、怒るのか、が淡々と、しかし印象深く描かれているのである。

学生たちは、こうした被爆した人々の日常を描く作品と向き合い、「ヒロシマ」というできごとを理解することと絡めて、どのように納得してみればいいのか、おそらくは戸惑ったのではないだろうか。この戸惑いは、先の『ゴジラ』への違和感とどこかで繋がっているだろう。現代の学生だけでなく、私たちが普段、「ヒロシマ」というできごと、「ヒロシマ」をめぐる言説をどのように限定し、理解していくのか。そうした実践を解読する作業をすすめていく今ひとつの手がかりとして、この戸惑いを考えたい。

ということで、学生たちの感想を整理していくことにしたい。

2．恐怖・悲惨

＜原爆への恐怖・被爆したことへの悲惨＞

「このビデオを見て、私は改めて原爆の残酷さを知った。それに映像が白黒だったのでさらに恐怖が増した。……原爆の落ちたヒロシマの街並みは見るも無残な姿だった。たとえ映画だとはいってもリアルに原爆のヒロシマを描いていたし、人々の姿をとってみても、あたかも今原爆を受けたかのようにとても良い演技だったし、演技がうまかっただけに私はゾクッとした。」（ｍ４）

「この「ひろしま」という映画は、すごく見るのに勇気のいる映画であると思う。映像は当時の状況をすごくリアルに表現しているし、見ているとその中に入っているような気になってしまい、引き込まれるような気がして怖かったと言うのがこの映画の印象である。」（ｍ５）

「「ひろしま」という作品を見てすごくショックを受けた。今まで何本か原爆に関するビデオを見たがここまで衝撃を受けたビデオは初めてだった。最初のナレーションの言葉から戦争、原爆に対する恐怖が伝わってきた。」（ｆ２）

「映画ではピカのすぐ後の映像が、正直とても怖かったです。私が今、住んでいる広島にはとても見えませんでした。映画の中で誰かが言っていましたが「地獄」そのものでした。手は前に垂れ、髪は逆立って、顔はケロイドだらけで、男か女かわからなくて、服はぼろぼろにやぶれていました。原爆資料館で見たままでした。……私のいた高校のグランドは、元々は原爆で亡くなった人を焼いた場所だというのも聞いたことがあります。……寺町、比治山、稲荷町いつも私たちが利用しているところです。平和公園もいつもバイトに行くときの通勤路です。あの土の下にはたくさんの人が亡くなっています。広島の川にもたくさんの人が行き着いて、いき絶えています。これから広島の町を歩くときは気持ちが変わりそうです。」（ｆ９）

『ひろしま』では、原爆投下され閃光が走った後、直後の惨状を延々３０分ほどにもわたって、再現している。学生の感想にもあるように、できるかぎりリアルに人々が死に、焼け爛れていく状況を描いていく。もちろん、前章で私がその映像を詳細に読み解き、私なりに感じ取ったように、そこにはある“抑制感”“整然とした秩序”があるのだが、やはり、この映像の長さは、見る側にほぼ確実に恐怖、悲惨の感情を呼び起こす。「今まで何本か原爆に関するビデオを見たがここまで衝撃を受けたビデオは初めてだった」という感想がある。『ひろしま』を製作した人々の意図は、まさに原爆の惨状を多くの人に伝え、恐怖を抱かせ、その恐怖が戦争、原水爆使用への恐怖へ移行していくことにあったのだが、恐怖を抱かせるという点では、成功していると言えよう。映画公開当時は、どのような反響があったのか、詳細には調べていないが、ほぼ 50 年たった現在、被爆の惨状を再現しようとする映像の力は、十分に保たれているのではないだろうか。

ある学生は、ただ恐怖を語るだけではなく、映像のなかで生きていた当時の人々の心情

にまで入り込もうとしつつ、「原子爆弾の威力」を語ろうとしている。

「この映画はすごく観づらい。映像が古く、白黒の画面に慣れていないせいもあるだろうが、映像のすさまじさに観るのがすごくつらい。戦争での広島に投下された原子爆弾の威力のすごさがこの映画ではすごく伝わってくる。原子爆弾が投下された直後、周りにいる人が誰かも分からずに、「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣き叫ぶ子供たちや、見失った自分の子供を探し回る母親や父親の恐怖におののく表情がすごくリアルに表現されている。原子爆弾が投下されたときの爆風や熱風によるあまりの恐怖に言葉が言葉にならない状況である。八月六日に原子爆弾が投下される前でも、毎晩のようにある空襲警報に対する恐怖感や、Ｂ－２９の飛行する音に対しての不安感や苛立ちなど、当時生きていた人はすごく残酷な目にあっていることを再認識した。原爆が落ちてきた瞬間は、恐怖感と言うものは感じなかっただろうが、猛烈な放射能や、爆風、爆音、すさまじい熱風や炎など恐怖を感じずにはいられない状況である。熱風により、皮膚がただれて焼け焦げ、強烈な爆風により飛んできたもので怪我をしている。近くに建物があれば、爆風で割れたガラスの破片が体中に突き刺さったり、倒壊した建物の下敷きになったりと原子爆弾の被害に遭い自分が何をしているかも分からずに、ただ泣きながら、親を呼び、助けを求めている。人は自分が窮地に陥ったとき、周りは目に入っていない。「自分が助かれば…。」という考えしかないであろうし、自分がその場にいたならば、まず周りは見れないと思う。どんなに子供が爆風で飛ばされ地べたで泣き叫んでいても、自分の命のために無視せざるを得ない状況である。大人でも子供でも赤ちゃんに対してでも無差別に殺す原子爆弾は、この世に存在すべきではないものである。」（ｍ５）

これでもかといわんばかりに被爆直後の惨状を再現し、剥き出しのままで見る側に押しつけてくる映像。この映像に対し、多くの学生たちは、素直にショックを受け、そのすごさに驚く。しかしショックを受けながらも、そうした感情、情緒をどのように自分の中で一定おさめていけばいいのだろうか。凄惨な映像に対するショックをそのままにしておけば、映画を見ている自分の場所が揺らいできて、とても不安になるだろう。このなんともいえない不安、不安定さをストレートに語る学生もいるし、さまざまな場所にとりあえずしがみついたうえで、被爆映像と自らの存在との距離を確かめようとする感想や評価が語られていくのである。

たとえば、被爆映像は、広島という街の外形的な破壊だけではなく、人々の内側にある心の被害へと、学生たちに思い至らせていく。自らが暮らしてきた場所が、かつて被害を受けた人々の避難場所であったという記憶が、『ひろしま』での被爆映像とどこかでつながり、惨状、悲惨の中身が学生のなかで深まっていくのである。

「あまりの熱により影が地面に写り、人が一瞬にして焼け消えるほどの衝撃と高温の爆風は、体験しようとも体験できるものではないであろうし、体験したくもないものである。人をも焼き消す、その高温で焼けるような熱風により、ありとあらゆる建物は崩れ落ち、産業と工業で発展を遂げようとしていた広島の町は、瞬く間に町全体が廃墟のようになってしまった。爆心地から遠い地域でも、すさまじい衝撃であるため、家屋が倒壊したりだ

とか、ガラスが割れて飛び散ったりだとか、さほど変わりのない被害があったという事は聞いた事がある。しかし、人々はそんな無残な状況の中でも、被害が少ないところを目指し、一刻も早く爆心地付近から逃げようとしている。そのこともあり、私の家の周辺は、原子爆弾の被害を直接受けた人々の避難場所として利用されていたのだと思う。原子爆弾の投下による被害というのは、目で見える被害というのはひどいものであるというのは当たり前であるが、原子爆弾の投下の瞬間の恐怖感や威圧感というものは一生消えない傷となり、いつまでも人々の目に焼きつき離れてはいかないものであるだろう。人間の内側にある心の被害というものの方が目で見える被害に比べると大きいと思う。建物や町の状況というものは、時間の流とともに復旧していくものではあるが、人間の内側にある心の傷というものはいくら消そうとしても消しようがないものである。」（ｍ５）

＜被爆映像への批判そして評価＞

被爆映像にいわば“素直に”驚き、向き合う一方で、学生たちは、その映像の暗さ、やりきれなさに違和感を語り、『ひろしま』が伝えようとするメッセージを理解しようとしながらも、その伝え方の強引さに抵抗をしめしていく。

「「ヒロシマ」には暗いヒロシマのイメージしか残らない。もちろん映画の中には70年間広島では生物が生存できないと言われた中での大根の種でみんなの希望が描かれていたが、あんまり印象に残らない。暗い方の印象が強く残るのだ。最後の亡くなった人々が起き上がる場面を見て、原爆の悲惨さや二度と繰り返してはいけない・忘れてはいけないと思ったけど、戦争や原爆が内容なんだから、もう少し明るい感じの終わり方がいいと思う。次につなげていくのも大事だからだ。」（ｆ３）

「“ひろしま”という映画をはじめて見た。原爆を投下されてからのシーンが異常に長く感じた。別に気持ち悪いとかは全然思わなかったが、異常に長く感じた。私は被爆シーンを見ると、祖母がこんなもんじゃない、といっていたことを思い出す。“こんなもんじゃない。”でも私にそれ以上のことを想像することができない。」（ｆ７）

被爆するとは、どのようなことなのか。それをリアルに伝えたいという意図はわかる。もちろん、そうしたことは映像で再現しようとした時、楽しく気楽に見られるものではない、ということもわかる。でも、それがわかったうえでも、やはり暗い、やりきれないというイメージだけが残る映画は、見るのがとてもしんどい。

映像をめぐる解釈は、「ヒロシマ」の悲惨→被爆映像の暗さ→反戦・反原水爆というメッセージの真摯さ→暗さとともに真摯さを受け入れていくことのしんどさ、違和感→でも、「ヒロシマ」はそんな気楽に理解できるものではないという思い等々。学生たちの感想は、『ひろしま』から溢れ出してくる映像の暗さに驚き、こうした解釈の螺旋のなかをさまよい、どのように出口を探していけばいいのかに戸惑っているようだ。

ただ、なかには『ひろしま』が見せるような映像を「戦争の恐怖を伝える為の一つの方法」として評価しなおし、自らがそれまで抱いていた戦争映画観を批判的に読み解こうと

する感想もある。人を楽しませる、エンターテインメントとしての映画という理解だけではなく、必ずしもハッピーエンドではないにしても、何かを学ぶべきものがある映画の意義を、この学生は語ろうとする。ただ恐怖し、暗いと批判するにとどまらず、なぜ、これほどまで、被爆の凄惨さを再現しようとするのか。なぜこうした映像をこれでもかと見でようとするのかを、映像の意図を自分なりに理解しようとする思考の動きとして、こうした感想を読むことができる。

「まずこの映画についての直接的な感想ですが、白黒の画面に少し抵抗はありましたが原爆や戦争の恐ろしさが十分伝わってきました。特に原爆投下とそれ以後の話、それと最後のシーンはとても考えさせられる物がありました。そして白黒だからと言う訳ではなく、とても新鮮な感じを受けたのを覚えています。それは今まで自分が観てきた戦争映画は『プライベートライアン』等のようなアメリカを舞台にしたものがほとんどで、日本の戦時中の映像を時代背景などではなく、それ自体を主題にした作品はあまり見る機会がなかった…というより、自分から観ようと思いにくかったのです。何故かと言うと一言で言えば「テーマが重いから」。救いようのない映画を観ても気が滅入るだけ、暗い映画を観ても自分まで暗くなってしまうでしょう。自分の中で映画はハッピーエンドで終わって欲しい、終わるべきだと言う考えがあります。それは映画がエンターテイメントであり人を楽しませる、または感動させてくれるためのものだとすれば、バッドエンドにする必要はないのではないか、観る人を不快にさせる必要が本当にあるのか、そう考えているからです。だからこそ自分はなるだけポジティブな作品を観るようにしてきました。ですが今回この映画を観て少し考えが変わりつつあります。この映画のように、戦争の恐怖を伝える為の一つの方法としての映画、学ぶべき物がある映画は大切だと思うし、エンターテイメントの枠を越えて大勢の人に観て知ってもらいたいと思うからです。」（ｍ３）

＜『ひろしま』と『原爆の子』の比較＞

ところで、感想の多くには、『ひろしま』と『原爆の子』の映像から受ける印象の違いが書かれている。学生たちは『原爆の子』の描写を「見やすい」「ソフト」だと語る。そのうえで、両者の映画が見る側に伝えようとしている「原爆の恐ろしさ」の意味の違い、位相の違いを考え、納得しようとする。

「「原爆の子」を見たのは「ひろしま」を見た後だったので、原爆に対する描写があまりにも違うのには少々の驚きがあった。「原爆の子」は「ひろしま」に比べて、原爆に対する描写がソフトな感じがした。その分、ストーリーが私の中では「ひろしま」に比べて「原爆の子」のほうが格段見やすくなっているように私は思った。

原爆によっていろいろな人にいろいろな事が起こってしまった。それが日常生活の中で実感出来る形で残っているというのがまた原爆の恐ろしさが表されていると思う。これ見よがしに悲惨さを見せるのではなく、静かに、そして日常という現実の中で原爆の傷というものが表されている。私はこれを見て、とても怖くなった。それはリアリティがそれなりにあるからだ。他の人がこれを見てリアリティがあると言うかどうかは分からないが、

私は怖かった。やはり「ひろしま」に比べて、「原爆の子」のほうが、ストーリーが優れていることのあらわれだと思う。」（ｍ８）

「この作品（『原爆の子』）はとても見やすかった。なぜそう思ったかというと、あまり残虐なシーンがなかったからだ。残虐なシーンを見せるだけが、原爆の恐怖を伝える手段ではないのだと実感した。原爆という恐ろしい出来事を『表現・伝える』にもいろいろな方法がある。この作品は原爆がたって数年後の広島が舞台となっている。町は平和になりつつあり、生活も十分出来るほどに復帰しているが、原爆が落ちた日から深く傷ついたままの人たちもたくさんいる。この話は一人の先生が過去に教えていた子供を尋ねていき、今もまだ戦争で苦しんでいる人たちを描いている。たしかに戦争は終わったかもしれない、しかしこのように苦しんでいる人がいるということは、まだ戦争は終わってはないのではと思う。……今まで見たビデオはどれも原爆投下がメインになっていたが、この作品はその後も苦しんでいる人がたくさんいるのだということを伝えたかったのだと思った。こういう作品も中にはあっていいと思った。」（ｆ２）

「映画（『原爆の子』）は戦前の平和な生活がいくつかのシーンで描写され、そして運命の８月６日８時１５分は時計で表示される。何が起こるかわかっている私たちにははらはらする瞬間である。原爆投下後のシーンは現在の映画を見慣れている私たちには少し拍子抜けするほどわりあいあっさりとそれほど長くなく描かれている。それはSFXが発達していなかった時代の所為かもしれないがむしろ意図して短くしたのではないかと思える。
一つには映像で長くリアリティのあるシーンを見ても現実とは認識できないということがあるからである。……もう一つには表面的には平和に見える社会でどんなに原爆の後遺症があるかを描きたかったからではないかと思う。」（ｍ６）

ただ残虐なシーンを見せるだけが原爆の恐怖を伝えるものではない。一見さりげなく見える日常、被爆後数年たったヒロシマの日常の中に、深い傷がまだまだ残っており、それが過去のできごとではなく、いま、人々を苦しめ、人々がそうした傷と、さまざまなかたちで立ち向かっている。この事実が伝えられる映像を味わう時、原爆の恐ろしさを感じることができると。
確かに前章で私も読み解いたように、二つの映画に見られる被爆直後の映像には、大きな違いが見られる。きわめて様式化されなにか美学すら感じ取れる『原爆の子』の緊張した映像。私はこう感じ取ったのだが、学生たちは「少し拍子抜けするほどわりあいあっさりと」したものとして感じ取ったようだ。他方、時間的にも長く、量的な、まさに映像の塊として、延々と流される『ひろしま』の映像。これについても、確かにできるかぎり惨状をリアルに再現しようとした意図はわかるが、映像の中の惨状、それを演じている俳優たちの熱演、怪演とは対照的に、私には“なにか緊張感が緩んでいく”印象を受けたのは事実だ。学生の感想にも、例外的と言えるかもしれないが、私と似たような感想を書いている者がいた。彼にとって『ひろしま』の映像は「退屈で」「眠くなる」ものであったと。

「まずこの映画（『ひろしま』）を見終わっての正直な感想を簡潔にまとめると、退屈で

眠たくなってしまうような、そんな内容だった。これについては私自身が悪いのだが白黒という映像に対してあまりいい印象を受けていないというのと、白黒を見慣れていないためか、誰が誰だか正確に把握することができないという、物語を理解するためには必要な要素がクリアできなかったのも私がこの映画を退屈だと感じた理由かもしれない。それと物語の方向性がいまいち分からなかった。メッセージとしては当たり前のように反核、反戦というものがあるのは分かる。そして忘れてはならないものとしての核、戦争ということもあると私は感じた。しかしそれだけで物語の良し悪しとしてはとても稚拙な感じが私はした。……そうかと思うと、いきなり原爆投下前の１９４５年の広島へ、そのまま原爆投下。それによってもたらされた悲惨極まる状況の描写へと続く。ここでの広島の街の描写は私にとって退屈以外の何物でもなかった。……更に、何度もいうが原爆投下直後からの状況の描写にはもうお腹いっぱいといった感じだった。元来私はこういった凄惨な(この場合、表現が間違っているかもしれないが)描写が苦手で、小学生くらいの時に見た映画『ほたるの墓』のような映像ですら怖くなって映画館から出てしまうような奴である。そんな私にとってそのような映像が約１時間も続くというのはあまりにもきつかった。」（ｍ８）

もちろん、二つの映像表現のどちらが優れているのか、など優劣を判断し論じるつもりは私にはない。それよりも、学生たちが、その映像の質的な差異を認めたうえで、それぞれから原爆の恐ろしさというメッセージを見出し、理解しようとする推論のありようが興味深く感じるのである。

＜『原爆の子』への違和感→「ヒロシマ」映画の典型的理解へ＞

なぜなら、そうした推論をたどると、そこに学生たちが、いわばあたりまえのように抱いている「ヒロシマ」映画の典型とでもいえるイメージが見え隠れしているからである。なぜ、『原爆の子』を「見やすく」「ソフト」だと感じたのか。なぜ被爆直後を描写する映像が「短く」「あっさり」していると、どことなく違和感を感じてしまうのだろうか。

やはり、そこには「ヒロシマ」をこのように理解することが“適切だ”という、いわば「普通のヒロシマ理解」を示していく手がかりを用いた痕跡が見られるのである。

「この作品のスタイルにおける、少し他の「戦争を題材にした映画」と異なっている点について思う所がありました。具体的に言うと、他のいわゆる「原爆資料映画」と違って原爆投下直後の描写が少ないといった点についてです。自分がこれまでに観た、広島に原爆が投下されたことを題材にした作品は、それがメインとまではいかなくても被爆直後の映像にやや重点が置かれているような印象を受けていました。原爆の恐ろしさを伝えるというそういった作品の存在意義からすればそれは必然的な流れなのですが、この「原爆の子」と言う作品においてそれはあまりあてはまらず、そういった描写は一部の回想シーンにおいてのみでした。……つまり、この作品は原爆の悲劇を伝えるために、他とはやや違う手法をとっているのではないか、ということです。ここで「悲劇」という言葉を使ったのは、自分のこの作品における主題の印象からですが、「悲劇」と「恐ろしさ」は自分の中では違います。被爆直後の広島の場景や被爆した人など、被爆当時の映像によって伝える

ことのできるものが「原爆の恐ろしさ」とするなら、被爆したことによって人生を狂わされた人の描写などによって伝えられるものもあるのだと思います。そういった意味でも、こういった被爆者の人生を主題にした作品は必要ではないでしょうか。「ピカがなければ…」といった台詞が作中でありました。この作品に限らず、いわゆる原爆モノでよく使われる言葉ですが、この言葉に原爆を受けて苦しんでいる人の気持ちが集約されていると思います。被爆したことでまともな職につけなくなった人、原爆の放射能による原爆病に苦しむ人、原爆で親を失い孤児になった子供、おそらくみんな同じ気持ちでしょう。なぜなら、自分たち荷担した事で受けた過失ではないからです。事実、あの一個の原子爆弾によって何十万人の人が殺され、また何十万人もの人が今も苦しめられています。私たちはこの事実に納得せず、被爆した人たちと同じように「どうして自分たちが？」と思う事が必要なのではないでしょうか。」（ｍ３）

この学生は、原爆の「悲劇」と「恐ろしさ」は異なると述べ、原爆投下直後の惨状を再現することだけが「悲劇」を伝えることではないと説明していく。見る側にストレートに衝撃を与える映像ではなく、劇中の人物が語るせりふの中に、原爆の「悲劇」が十分に現れ、それを見る側は理解することができるのだと。

おそらく、この学生は『ひろしま』と『原爆の子』を見ることで得たさまざまな印象の違いをなんとか納得がいくように整理しようとしたのだろう。そこで「原爆資料映画」とそうでない映画を区別しており、この区別はとても興味深い。前者は、常識的であり典型的な「ヒロシマ」理解を進めるものであり、そうでない映画は、広島に原子爆弾が投下され、それによってさまざまな出来事が起こし、今もそうした出来事が展開しつつある、というより広く深い「事実を理解しようとするまなざし」をもつことへの可能性が開かれている、とも言える。これは私がある意味で、期待していた説明という営みと言えるものだ。自らがなかばあたりまえのように思い込んでいた「ヒロシマ」理解、「ヒロシマ」を理解するための入口というか手続き、原爆の惨状を象徴するとされている典型的な描写のありよう、それをそのようなものだとして無批判的に受容していく自らの理解のありようなど。そうした営みが改めて検討の対象となるとき、このような感想や説明が出てくるのではないだろうか。

「さてこの映画は、よくある原爆ものの映画のように８月６日に焦点をおいて原爆投下の様子やズタズタになった街や人、そして復興へというのを描いたのではなく、原爆投下の６～７年後の様子が主に描かれていた。８月６日当日を振り返る場面も驚くほど少なかった。目を背けたくなるようなシーンが多く出てくるだろうと覚悟していた私はなんだか拍子抜けしてしまった。今まで目にしてきた原爆映画やビデオとは何か感じが違うな、というのがぼんやりとしながらも大きく残った印象だった。

今まで私が少ないながらも目にしてきたものはだいたい、戦時下の人々の何気ない普段の生活の様子から始まって８月６日の朝、８時１５分の原子爆弾投下、そして焼け爛れた街をさまよう焼け爛れた人々、「水、水」ともだえ苦しみながら亡くなっていく人々、あるいは学校に焦点を置いて子供達を中心にやはり８月６日やその直後の話が展開していく…といった内容のものばかりだった。一方この映画は８月６日の原爆投下は話の始まりのワ

ンシーンにしかすぎず、主人公である元幼稚園の先生の女性が思い出の場所と幼稚園の生徒を巡りながらそれにまつわるエピソードと現在の様子を展開していくという私にとって珍しいタイプの原爆映画だった。……しかしそんな話の流れの中でも原爆の恐ろしさを垣間見れるセリフやシーンがいくつも盛り込まれていた。私の中でも特に印象に残ったセリフが二つあった。主人公の女性の腕にガラスの破片が入ったままになっているというのを彼女の友人に話している場面で「私はあの８月６日を忘れない為にこのガラスの破片はいつまでも取り除かずに持っていようと思うの」と言ったのが一つ。そして昔主人公の女性の家で働いていた、年老いた男性が話の終盤で、原爆で負った自らの顔のやけど跡について「わしは皆にピカを忘れさせないようにこの顔でずっと生きていかなければならない」と言ったのが一つ。割と平和に落ち着いたかのように思われる街で発せられたこの二つの言葉が私にはとても重く感じられた。自ら身をもって８月６日の出来事を次の世代に伝えていくとはこういうことを言うのだなと思った。また他にも、年数が経ってから現れた原爆症に苦しむ人やそれによって亡くなっていく人が描かれていたのも原爆の恐ろしさや影響力の大きさを象徴しているように思われた。」（ｆ４）

この学生の感想では、「今まで私が少ないながらも目にしてきたものはだいたい、戦時下の人々の何気ない普段の生活の様子から始まって８月６日の朝、８時１５分の原子爆弾投下、そして焼け爛れた街をさまよう焼け爛れた人々、「水、水」ともだえ苦しみながら亡くなっていく人々、あるいは学校に焦点を置いて子供達を中心にやはり８月６日やその直後の話が展開していく…といった内容のものばかりだった」と、明瞭に従来の原爆映画や原爆を伝える啓発用アニメがもつワンパターンを批判的に指摘し、そうしたパターンを超えるリアリティをもつ映画として、印象に残ったせりふやシーンをまとめ、自らの解釈へとつなげている。

<アニメによる表現への率直な評価>

『ひろしま』にしろ『原爆の子』にしろ、実写による被爆をめぐる表現と出会い、学生たちは、一様に戸惑いを見せる。これまで見てきたように、そうした戸惑いをどのように自らの「ヒロシマ」理解と突合せ、落ち着かせていくのか、その営みのなかに、具体的な推論の揺れがあらわれているのである。

しかし、学生たちの感想には、『はだしのゲン』というアニメーションが示す被爆直後の映像に対しては、こうした戸惑いや揺れはあまり感じられない。その映像の迫力に驚きながら、残酷だとか暗いなどと否定的な感想を述べるのではなく、率直に映像の意義を評価していくのである。

「原爆が落ちたシーンでは恐ろしくて思わず見てるこちら側さえも声がでなかった。今原爆が落ちたんだなぁ、とこのシーンを見て思う人はほとんどだと思うが、本当に原爆にあった人たちは何が起きたか理解ができないと思う。今まで生きてきた中で経験もしたことのない恐怖感があり、肌がただれたり目が飛び出したりしている人が目の前を歩いていたり、地獄のような世界だ。もしかしたら地獄よりももっと悲惨で恐ろしい世界だったか

もしれない。」（ｆ２）

「水をほしがる人に水を飲ませれば死んでしまい死体を片付けても片付けてもたくさんある状況で「人間が石ころと同じあの一人ひとりの死体が笑ったり泣いたりしていたなんてうそみたいな地獄」である。死んだ母親がわからずその乳に吸い付いている赤ん坊や自分の子供が死んだため他の赤ん坊を見ると死んでしまえという母親がいるなど人々の心もすさんでいる。髪が抜け血を吐いて死んでいく人に対し医者は何もできない。いやその医者さえ残留放射能で死んでいくかもしれないのだ。四千度の熱線と爆風と火事、そして広島西北部に降った黒い雨によって直接死亡者だけで 20 万人というナレーションが入り原爆被害のすごさを知らせる。アニメであり映画であるという距離感が無ければ正視出来ない映像だ。」（ｍ６）

「一転して、８月６日以降の描写は当然のことながら、重たい空気に包まれているようだった。だが、アニメ映画なので原爆投下直後の人々の描かれ方も然程ではないだろうと軽く見ていたら、そうでもなくて驚いた。原爆投下直後の瞬間の人々の肉体的変化や建築物の崩壊が、とても丁寧に長時間に渡って描かれていた。他の映画では、人の正常な身体から、身体が溶けたり、黒焦げになったりするまでの過程は切り離して映像にしてあったが、この映画では人々の肉体的変化が一目散に見て取れて怖いくらいだった。映像がアニメーションだと、可愛らしい女の子は本当に可愛らしく、弱々しい老人は本当に弱々しく、誇張して描かれているので、原爆投下直後の思わず目を瞑りたくなるような彼らの姿が、余計に惨めに悲惨に見えてしまった。」（ｍ５）

なぜ、アニメ映像に対しては、こうした率直な評価が可能なのか。ある学生は以下のように説明する。

「一番気になっていた、原爆における描写も想像以上でした。自分にとって、アニメーションで戦争映画を観る機会はなかったのでこればっかりは解らなかったのですが、実写で表現できる枠組みを超えて原子爆弾の恐ろしさが伝わってきました。その要因には感情移入が容易に可能というアニメーションのメリットがあるのでしょう。実写と違ってアニメーションでは登場人物の心情や感情がとても感じ取りやすいのです。だからある意味、実写よりもリアルなものを感じる事ができるのです。実際、原爆投下後の描写には迫るものがありました。自分にとって、資料映画として重要だと思うのはこの点なのです。観た時に「怖さ」、「恐ろしさ」を感じなければ意味はありません。その気持ちを戦争、原子爆弾を知らない世代に伝えていく事が戦争映画の存在理由の一つだと考えるのなら、アニメーションという手法はこの上ないものなのかもしれません。」（ｍ３）

アニメは登場人物の心情や感情を感じ取りやすいし、実写の枠組みを超えて原子爆弾の恐ろしさを表現することができると。確かに私も前章で読み解いたように、原爆投下直後に人や動物、建物が崩壊していく表現は、アニメーションだからこそできるものかもしれない。実際に人間が崩れ溶けていく映像など、現代の技術を使えば容易に作ることはでき

るかもしれない。しかし、そうした映像を、もし「ヒロシマ」映画として、原爆映画として見るとすれば、やはり目をそむけたくなるのではないだろうか。見る側に原爆の恐ろしさを伝えることは必要であるし、そうした映画として向き合っている私たちは、やはり「恐ろしさ」をより深い形で感じ取りたいと思うのではないだろうか。『ひろしま』で試みられていた惨状の再現は、そうした「恐ろしさ」を伝える営みとしては、なかば成功しているといえよう。しかし学生たちの感想にあるように、その映像を自分たちが生きている世界へ写し取ろうとするとき、大きな抵抗にあっているのである。あまりにも暗いし、救いようのないイメージだと。否定的な感想は、映像それ自体の意義を否定してはいないのだ。やはり、それは、映像と自分をつなげようとする営み、映像が描く世界を自分が生きている世界へなんとかして写し取ろうとする営みに対して、映像それ自体が“冷淡であること”“助け舟を与えてくれないこと”への、苛立ちとして読めるのではないか。

もちろん、後でまとめていくように、学生たちの『はだしのゲン』への評価は高い。それは、映像の中に戦争批判、原爆の惨状が描かれているものの、このアニメーションのメインテーマは生きる力のすごさ、強さであり、家族愛というほぼ誰でもが認めざるを得ないであろう前向きのものであるからだろう。原爆投下直後の凄惨な絵も、その前向きのテーマをくっきりと浮き上がらせる「負の部分」として理解できるのだ。「負の部分」を単に「負」としてだけ、投げ出すのではなく、これをどのように理解すればいいのか、その道筋まであわせて示される時、見る側は、ある意味で、安定し、落ち着いて「負の部分」と向き合うことができる。

『はだしのゲン』というアニメーションは、そうした意味で計算され、「よくできた」作品といえよう。しかし、こうしたアニメ作品が与える感動や「ヒロシマ」理解は、一般的で常識的な枠を超えることはまずない。仮に見る側に感動を与えるとしても、それは私たちの日常生活に亀裂を入れたり、微細であるが確実な不安に陥れたり、そうした不安から、なにか新たな動きを生み出してしまったり、という計算不能で、予測を超えていく感動ではないだろう。私たちの日常生活で、いわば「反核」「平和問題」を理解するための“安定した棚”をつくる感動であろう。そして、そうした“棚”がいったんできあがってしまうと、「ヒロシマ」をめぐるさまざまな情報を“棚”が吸収してしまうことになり、常識的な理解が根底から揺らいでいくことは難しくなっていくのである。

「ヒロシマ」をめぐるアニメ作品がもつ、こうした問題性をより詳細に検討していく作業は、今後の課題の一つといえるものなのである。

3．無知

感想レポートを読んでいて、今一つの特徴が「無知への覚醒」であろう。広島に生まれ育ち、程度の差はあれ小中高校で平和教育を受けていく。その中で一定の「ヒロシマ」理解を身につけていく学生たち。しかし感想の中で、一定共通して見られたのが、被爆者差別、被爆した人々へさまざまなかたちで排除は分け隔てが行われているという事実を知らない、ということだった。

「その始めの場面（『ひろしま』）で驚いたのは、クラスのなかで原爆に遭った生徒が３

分の１だったこと、またある生徒が“広島市内の大半の人が原爆症の実態を知らないんです。”と言ったことであった。私の中の感覚としては広島中の人々は原爆に遭っていてほとんどの人が原爆の後遺症で苦しんでいる、といったものであったからだ。話中の担任の先生も原爆についての知識は全くといっていいほど持ち合わせていなかった。これには驚いた。戦後７年ですでに原爆を知らない人々がまだ傷跡の残る広島であんなにも大勢暮らしていたなんて、と思った。場所によって原爆に遭った人、遭っていない人はいても同じ広島で起こった事実、しかもたった７年前に起こった事をほとんどの人が知らないとは、まさか、という気持ちにさせられた。これは現在の私たちに置き換えてみると、生まれてからずっと広島に住んでいて小学校の頃から幾度となく平和学習を積んできながらも実はその実態や事実をほとんど知らないということに当てはまるのかもしれないが、それは 50 数年という時代の隔たりによるものであると私は思う。今目にする事のできる原爆の傷跡が原爆ドームや平和記念館等に限られていることも影響していると思う。しかし映画の舞台上ではまだまだあちこちで傷跡を目にすることがあったはずだ。何より周りに原爆にあった人が大勢いたのではないか。この点が私に違和感を残した。

周りに大勢いるはずの原爆症の人々をほとんど目にしないという点に関しての答えとも言うべきセリフがもう一つ私を驚かせたものであった。“原爆症の症状で苦しい言うとみんなはすぐ「原爆を鼻に掛けている」とか「原爆にすがっている」とか言って笑うんだ！”というのと“原爆に遭って今も肉体的にも精神的にも苦しんでいる人々は社会の同情によって生きていくか、醜いケロイドの跡を隠しながら日陰で生きていくしかないんだ！”というものだった。原爆に対して広島中が一丸となって戦い、平和を訴えかけているといった、言ってみれば綺麗なイメージしかなかった私にとってこのセリフはなかなか衝撃的であった。原爆症で苦しむ人々は保護されながら生活しているのかと思っていたが、そうでないことも分かった。」（ｆ４）

「この映画（『ひろしま』）では、原爆投下に遭遇しなかった人々が被爆した人々のことをどういう風に思っていたか、どのように接していたかがすこしだが描かれていた。そのシーンを見るかぎりでは、どうやら被爆を体験した人々は必ずしもそれ以外の人々からきちんと理解されていたわけではなかったらしい。「ピカにあったやつは自分がピカにあったことをはなにかけている」とか「それを言い訳にしている」などと思っている人が広島にもいたというのは、かなり意外なことだった。……この映画での指摘を真に受けるのであれば、原爆が落ちた地だから、平和の祈念碑があるから戦争の犠牲になった人々のことや平和についての教育がしっかり行われているものでもないらしく、これも考えてみれば、現在の広島でも私自身の経験や知識、ものの考え方などから、あまり熱心にそういう教育が行われているとは言い切れないのだから、この映画の時代がそうであってもべつに不思議はないということなのか。」（ｍ１）

「映画の中の学校のクラスの場面で、原爆を受けた人たちと受けてない人たちで言い争いが起こっている。原爆を受けた人たちは「ピカドン組」などと言われ、少しでも原爆を口に出すと、原爆を鼻にかけているとか、甘えているなどと言われ苦しんでいた。何か悪いことをしているかのようにケロイドを隠して過ごしていたのだ。もし、差別をしていた

人に正しい知識があったなら、少しは差別が減っていたかもしれない。私は原爆が投下されてから何十年後は原爆を馬鹿にする人は広島にはいなかったと思っていたから、驚いた。むしろ、今より差別はひどかったんじゃないかと思う。」（ｆ３）

戦後７年がすぎ、世の中が繁栄をとりもどしていくなかで、被爆した人々がきちんとした保障すらない状況で、どのように日常を過ごしていたのか。周囲の人々からどのようなまなざしを受けていたのか。『ひろしま』では、そのことが一つのテーマとなっている。学生は「場所によって原爆に遭った人、遭っていない人はいても同じ広島で起こった事実、しかもたった７年前に起こった事をほとんどの人が知らないとは、まさか、という気持ち」になり、被爆した人々が「それ以外の人々からきちんと理解されて」いなかったことを「かなり意外だ」と述べている。そして、そうした事実を知らなかった自分に驚き、なぜそうなのかを考えていくなかで、「現在の私たちに置き換えてみると、生まれてからずっと広島に住んでいて小学校の頃から幾度となく平和学習を積んできながらも実はその実態や事実をほとんど知らないということに当てはまるのかもしれない」と振り返り、現在の広島で行われている平和教育が「あまり熱心」とはいえず、自分もそうした教育を受けてきたのだから、映画の時代も似たようなものだろう、と推測していくのである。

こうした推論には、何層もの驚きがあるようだ。映画の中で被爆した人々が差別を受けるシーンを見て、驚き、そんなはずはないと思い込んでいた自分の姿に驚くのである。さらに、そうした事実を知らず、「原爆に対して広島中が一丸となって戦い、平和を訴えかけているといった、言ってみれば綺麗なイメージしかなかった私」の姿に少なからずショックを受けていくのである。

なかには読んでいて、自分の存在を横に置いた、何か醒めた印象を受けてしまう語りもあるのだが、やはりそこには現在の平和教育への批判が語られている。被爆した人々がどのように暮らし、どのように現在に至っているのかをきちんと教えられてこなかったこと。ただ単に加害―被害という二分法図式ではなく、被爆というできごとが広島の街や人々の中に、どのようなせめぎあいや苦悩があり、そうした負の部分から蘇生しようとした運動など人々の動きがあったのかを十分に知らされていなかったこと。平板な戦争反対、反核、平和メッセージを復唱するだけの、わかりきった平和教育ではなく、実際に広島の人々がどのように生きてきたのかを詳しく伝えようとする教育が欠落していたことなど。そうした教育を受けてこず、被爆した人々が生きた現実に「無知」であった自分の姿を批判していくのである。

また女子学生たちは、被爆した女性が、当時受けていた結婚差別に心を動かせていく。

「原爆に遭った女性が結婚する時に差別を受けていたことも後で知った。この映画の中でも結婚を諦めたと語る女性が登場してきた。他にも、原爆を思い出したくないが為に一切原爆に遭った事を口にせず、原爆手帳の交付も受けていない人がいることなどを聞いた。私はなぜひどい目に遭った人がさらに社会の冷たい目にさらされてつらい思いをしなければならないのかと思ったが、表立って原爆症を表すと鼻に掛けていると言われる…。居場所がないなと思った。そのように周りに理解されないまま苦しみながら無くなっていく…。なんて報われないのだろうと思った。」（ｆ４）

「思いを寄せている原爆によって足を不自由にしてしまった女の子に、軽はずみに「嫁さんにしてやる。」と言ってしまって彼女を傷つけてしまった。私は彼女が理由を述べるまで、どうして求婚されているのに嫌そうにしているのか、理解できなかった。彼女は足を不自由にしているので、結婚は諦めていると言っていた。しかし、結婚に対する憧れの気持ちは拭いきれずにいるので、軽はずみに結婚について語って欲しくないようだった。不意に、『黒い雨』の原爆の放射能を浴びて結婚を諦めていた矢須子（田中好子）を思い出した。現在では、一生独身でいることも良しとする選択肢も定着しつつあるが、昔は年頃になったら、女性はお嫁に行くことが当たり前のような時代だったので、結婚を諦めるということは、現代よりも辛いことのように思われる。広島の町に落とされたたった一つの爆弾が、多くの人の命だけでなく、人生を歩んで行く上で大切な夢や希望までをも喪失させてしまったのだと感じた。広島に原爆が落とされたことによって生じる問題は、人が亡くなって悲しいとか、肉体的な苦痛があるとか、そういう表面的なことだけではなくて、もっと根深いところまで浸透しているということが、改めて分かったような気がする。」（ｆ５）

そして、彼らは、当時の被爆した人々とそうでなかった人々の間にあった差別や排除、両者のあいだのさまざまの確執に思いいたると、たとえば、自らの身内である被爆体験をもつ祖母と「じっくり」話し合おうと考え出す。映画で描かれていた時代、登場している人物ではなく、自分のおばあさんはどのような思いで、どのように生きていたのか。それを知りたく思うのである。

「この“ひろしま”の映画を見て、やはり原爆症で悩む人達と原爆症でない人の態度をみて、今の広島の被爆者と若者の関係に似ていると思った。自分が原爆を体験してない人は原爆症の人に対して原爆症を理由に…と思っている人がほとんどで、原爆症の人は病気を隠して生きている。原爆症の人は肩身の狭い思いをして生きなければならなかった。祖母はどんな気持ちですごしてきたのだろう…。今度じっくり祖母と話しをしてみようと思う。」（ｆ７）

この、祖母と向き合おうと気持ちは、「近くにあればあるほど人は関心をよせない」と、広島に暮らしている人々、特に若い人たちの「ヒロシマ」に対する熱の醒め具合、無関心を実感し、それへの苛立ちに裏打ちされている。同じ女子学生は、こう書いているのである。

「映画のはじめに授業シーンがあった。そこで一人の男の子が、原爆をうけてない日本人、広島の人、このクラスの人に原爆をうけた人の気持ちをわかってもらいたい、と。

今、被爆した人は原爆資料館を訪れる人に平和の尊さを訴えている。しかし、その人たちはほとんど広島県外の人達、外国人だ。私は映画の中でいった男の子のように、広島県外・外国の人ではなく、一番に広島の人に理解してもらう必要があると思う。被爆した人たちは平和の尊さを広島県民の人なら理解してくれていると思っているだろう。残念ながら、若い人達は平和の尊さなんて知らない。ぎりぎり、８月６日にはテレビなど学校で原

爆・平和学習をするので、原爆を人類史上初めて投下されたことを知っているだけで、ほかに何も知らず、関心もない。

近くにあればあるほど人は関心をよせない。あるのが当たり前でそれ以上のことについて関心をよせなし、関心を持とうともしないものだ。私は江田島で生まれ育ったが、旧海軍兵学校の見学に一度も行ったことがない。旧海軍兵学校のなかには特攻隊で亡くなった人の遺書が保管されてあり、見学者は見ることができるらしい。しかし、私は一度も見学に行ったことも無いし、見学に来る人がなにしにくるのか理解に苦しんだ。」（ｆ７）

ただ、この女子学生のように、自らが「無知であること」に驚いた後、必ずしも「知りたい」という思いが生じてくるわけではない。多くの学生は「知るべきだ」と書いているが、一方、「「知ってもらいたい」という言葉を映画の中で聞いたとき痛いところをつかれた気がした。私は、全然原爆に興味がない訳ではないけど、好んで知りたいとも思わない」と述べ、「痛いところ」をつかれたと感じながらも、原爆に興味や関心がなくなっていきつつある現在を、諦めにも似た感じで見つめる感想もある。

「知るべきだ」「でもあまり知りたいとは思わない自分がいる」「世の中はどんどん無関心の方向へ流れていっている」「では自分はどうしようか」「大変なことだと思うけれども、自分でなにか動こうとまでは？」……。こうしたぐるぐる回る、いわば出口が見えない渦の中でためらっている印象を受けるのである。

「つくづく原爆の映画を見ると、自分が原爆に対して本当に何も知らないと思い知らされる。「知ってもらいたい」という言葉を映画の中で聞いたとき痛いところをつかれた気がした。私は、全然原爆に興味がない訳ではないけど、好んで知りたいとも思わない。この映画がいつ作られたかは知らないけれど、たぶんずっと前だろう。その時から、原爆について知らない人が多いのなら、これは大変な事だ。将来、原爆を語り継ぐ人たちがいなくなる可能性もあるのだ。最近では８月６日に一日中嫌というほど原爆のテレビ番組もないし、みんなの興味や関心もなくなっているように感じられるし、このままでは学校に行っている時しか原爆について考えなくなってしまうだろう。平和な時だからみんなの興味が戦争や原爆にある訳がないのだ。平和に慣れた日本の将来が怖くなってきた。みんなすべて忘れてしまっていそうだ。」（ｆ３）

４．忘却

「無知であること」におどろき、あるいは気づき、学生たちは、その背景とでもいえる「忘却」を語っていく。

「冒頭で「広島の人々さえ広島で起きたことを忘れようとしている」といっていました。あの時代でさえそう言っているのだから今はどうかというと映画の舞台となった時代以上に、原爆のことを忘れているような気がします。」（ｆ９）

「広島は原爆によって街を破壊されたことをほぼ忘れているようだ。私の父と母の時代

はまだ戦後まもなく苦労しただろうし、戦争は身近なものだっただろうが、私達の時代になるとあまりにも遠いことすぎて、苦労しただろうなぁ、悲惨だろうなぁ、とかいった感想はもてるもののそれ以上の関心をよせることができないのだ。平和の尊さがわからないのだ。どんなにいろいろな映画を見ても、原爆資料館を見学しても、服装の違いとか、写真が白黒だったり、その頃の生活がどんなものなのかあまりにも今と違いすぎで想像しにくく、大げさにいえば、時代劇を見ているような感覚になっている。」（ｆ７）

「この映画は、全体を通して原爆の悲惨さが時代とともに忘れられていくことをテーマにしているのだと思う。と言うのも、学校の授業中に原爆症が現れた生徒が保健室に運ばれた後、被爆した生徒が先生に「夏になると体がだるい。」と言った生徒に、「夏は誰でもだるいもの。」と横槍を入れる生徒がいたり、戦時中に原爆によって悲惨な目に会ったはずの日本の工場が、戦争が終わってから７年して大砲の弾を作り始めたりと、日本がではなく、広島に住む人たちが、戦争の事を忘れつつある事を取り上げていたからだ。」（ｍ２）

「広島は、原爆によって戦災孤児が多かった。この映画の中でも、幼稚園の園児が原爆で生き残ったのは三人しかいない。その中の一人も、原爆の後遺症によって死ぬまぎわであった。……戦争・原爆によって生き残った人の中で一番の被害者は子供なのではないだろうか。大人による自分勝手な戦争で、生活苦を強いられ、孤児になったりで…。しかも、今現在で戦争を知っている人の多くが、子供時代に戦争を体験している人達ばかりだ。

戦争が起きたことによって、広島は原爆を投下され、多くの人が苦しんだ。その戦争での苦しみを知っている人は日本でかなり少なくなっている。語り継ぐ人も少ない。

戦争の恐ろしさは、時が経つにつれて人々にわすれられていっている。広島の象徴・世界遺産の原爆ドームさえ、年々痛みが進み、何ミリか地盤沈下をおこして、存続の危機となっている。人間の一番悪い所だ。すぐに忘れてしまう。……広島の原爆も同じだ。原爆の後遺症で苦しんでいる人がいる間は、“ピカ”の恐ろしさをどこでも話題になっただろう。しかし今、原爆の後遺症で苦しんでいる人はいない。それどころか、原爆を知らない人々ばかり増え、原爆の恐ろしさを知る人がいなくなって、戦争への不安感さえもっていない。

今、戦争・原爆に興味がある若者がどのくらいいるのだろうか。」（ｆ７）

『ひろしま』や『原爆の子』をじっくりと見ることで、自らの「無知」や「忘却」に気づいていく。客観的に映画が「忘却」をテーマとしていることを述べる感想もあるが、「原爆だけでなく戦争の悲惨さと言うものは、絶対に忘れてはいけないもので、被爆した人たちから戦争を知らない年齢の人たちに伝えていかなければならないという事。そして、これは毎回原爆を取り上げた映画などを見るたびに思うのだが、核兵器はたとえ戦争でも使ってはならないものだと改めて思った。」というかたちで、いわば「どんなことがあっても忘却すべきではない」という正論を確認するものもあった。もちろん私は正論を確認しただけ、というふうに否定的に評価しようとは思わない。ただこうした正論を確認する感想からは「ヒロシマ」理解をめぐる常識的で定型的なパターンへ回収されていく力が感じ取れる。そのことがやはり問題だと考えるのである。

忘却していく世の中への苛立ちを述べながらも、苛立つ自分はどうなのか。奇麗事は言

うけれども、夏が来るたびに原爆を考えさせられるのが嫌だった自分、「ヒロシマ」を忌避していた自分がいる。世の中への批判と自己批判がないまぜになりながら、苛立ちを率直に語りだそうとする感想とは、やはり対照的なのである。

「以前に見た「原爆の子」と違って広島に起こった現実をそのまま映し出したと言うこの「ひろしま」。原爆が落とされたとき、一体何が起きたのだろうか。そんなことを考えるまもなく消えていった人はたくさんいる。そして生き残ったとしてもこの世のものとは思えないほどの苦痛を味わう事になった。なぜそんなことが出来たのだろうか。日本の勝手をやった結果とはいえ人間沙汰ではないと思う。……毎年何人もの（外国人）観光客がここ広島に訪れては平和への意識を高める人がいるし、戦争反対の意識を持つ人が現れるというがはたして心の底からそう思っているのだろうか。支離滅裂、有言不実行、さまざまな言葉が私の頭をよぎる。核実験は収まらない、戦争は終わらない……。本当に分かっているのか？……と、えらそうな事を言っていても所詮一個人の戯言にしか過ぎないであろう。でも私は広島で生まれて育ってきた今までの人生で、原爆（戦争）の怖さはそれなりに知識を持っていると思う。いや、広島に生まれた以上知らなくてはいけないことなのではないだろうか。そんな私は人を殺す事やましてや自殺をしてしまうことが恐ろしくて出来ない。……しかし広島に生まれたからにはこの惨事を知らないといけないと私は言ったが、実は嫌だった。夏が来るたびに嫌だった。怖かったからだ。小さいときから教わってきたのは恐ろしい事実だけだったから。こんな体験をした、こんな風になった。聞くたび見るたびに吐き気をもよおしたくらいだ。そのときばかりは広島に生まれた事実をうらんだ。何でこんな事を知らなくてはいけないのだろうか。もう戦争は終わったんだし、自分たちには全然関係ないことではないか。……何度思っただろうか。実は今でも時々そう思う。……だけど知っていればそんなことをしない。恐怖は時として教育になるんじゃないだろうか。怖い、見たくない、そんな恐怖があるから、しない。「こんな悲劇は繰り返してはいけない」とよく聞くが、上っ面だけではそんなことは言えない。こういうことをしたらこうなると記憶に移しておけば誰もしなくなるだろう。私は実際そうだ。そうならない人もいるが大半はそんな人だろう（と信じたい）。でなければこんな恐怖を植え付けるような真似は誰だってしたくないだろう。」（ｆ８）

５．実感・実体験の想起

学生たちは、「ヒロシマ」をめぐる映画を見る時、被爆直後の凄惨な映像などに心を動かせていくとともに、彼らに特有なかたちで、映画のある部分へ引き寄せられていく。それは実際に彼らが暮らしてきた広島の具体的な場所の映像であり、場所への言及の部分である。実感あるいは実体験、身内から聞いたできごとの記憶などが、この部分に注意を払うことから、引き出されていく。こうした実感、実体験の語りは、彼らに「ヒロシマ」へ接近させていく具体的な契機であり、いわば自分の暮らしの中へ、今一度「ヒロシマ」を引き込んでいく重要な力として語りを読むことができる。

「今回の映画を観て印象に残った場面があります。それは劇中の被爆した人が「君はど

こから来たの？」と聞かれ「比治山です。」答えた場面です。前に書いたように、自分は広島で育ちました。広島に住んでいる人なら比治山はとても身近な地区なのです。比治山方面行きの電車や母が通った比治山女子大、市内に出た時いつも見る比治山方面行きと書かれた標識を見なれている自分は、その一言を聞いたときぞくっとしました。わかっていたはずのことだったのに、いつも大学に行くときに通る賑やかな市内の通りが、ほんの数十年前には焼け野原だったのか、ここで何万人もの人が亡くなったのか、そう考えるとものすごい違和感を感じました。その時自分はふと、もしかしたら自分たちは平和学習などを通して戦争の恐ろしさや悲惨さを「わかった気になっていた」だけなのかもしれないと思ったのです。戦争の本当の恐ろしさは、本当に戦争を経験した世代でないとわからないのでしょうか。もしそうだとしても自分は今回の映画を観たことのように、戦争や原爆の恐ろしさに触れる機会は必要な事だと思っています。そうしなければこの先、その事が忘れられ、薄くなっていくような気がするからです。」（ｍ３）

普段見慣れている「比治山方面行き」という標識。その一言を聞いた時、「ぞくっ」としたと語る学生。初めて、これまで、そしていま、自分が暮らしている日常の場が、被爆というできごとと繋がっていたことに気づき、改めて自分の暮らしという位相で驚いていくのである。そんなことは歴史的な事実として理解していたはずなのに、これまで受けてきた平和学習でわかっていたはずなのに、見事に忘れ去り、自らの日常と被爆という事実が切断されていたこと、乖離されていたことに驚き、「違和感」を感じていくのである。地元であることを実感することから、自らの「ヒロシマ」への姿勢、平和学習を通して「わかったつもり」になっていた自分の姿があらわになり、そこへ反省のまなざしが向けられていくのである。

「以前に祖母から聞いた、これに似たような話を思い出した。戦時中は、夜になってから爆撃の警戒警報が出されたときには、電灯を消してロウソクに灯を燈し、明かりが外へと漏れないように、布のようなもので覆い隠していたそうである。防空頭巾やもんぺも接ぎはぎをして縫ったり、大きな防空壕も掘って近所の人たちと幾日も過ごしたと聞いた。祖母は戦時中の辛い時期のことに関しては、あまり詳しくは教えてはくれなかった。しかし話をしてくれるときの祖母の表情はとても暗く、うつむき加減で、「大変だった。」とか「辛かった。」と、ポツリと一言言われるだけで、それらの言葉に重みがあり、他には何も言ってはくれなくても感じ取れるような気がした。」（ｆ５）

ある女子学生は、映像を見ることから、かつて聞いた祖母の昔語りを思い出している。祖母の語りの内容よりも、語る様子、「大変だった」「辛かった」という一言の重みを、今一度、反芻していくのである。

他にも被爆建物でボランティアをした時の経験、小中学校の平和学習で「戦争・原爆を体験した人の話を生で聞いたこと」が実感をこめて語られている。

「『原爆の子』は当時の映像を多く使っているので、とても貴重な映画だと感じた。原爆が投下された数年後の実際の映像を使っているようだ。この映画を製作した監督はなぜ映

像に残そうと考えたのだろう。大学に入ってから、広島の街を歩く機会が多くなって、映像の中に出てきた場所を見たことがあるもののあり、原爆資料館で展示されていたものと重なって、より一層興味をそそられた。とくに旧日銀の正面玄関の階段に座っていた人が“ピカ”の瞬間に影しか残らなかったという映像は、印象に強く残った。それはボランティアで旧日銀の建物にいたとき、来られた人に聞かれたという事もあったからだ。旧日銀は現在も残っている貴重な被爆建物だが、建物の中はとても夏でもひんやりしていて、少し怖い感じがした。警備員の方に言うと全部の部屋を見せていただくことができた。建物はとても頑丈に作られていたため、原子爆弾の威力に耐えられたのはすごい。しかし、当時の写真も見せていただくと、旧日銀の無残な姿が見られた。爆風でガラスは吹き飛び、窓枠がまがった写真もあった。」（ｆ１）

「私は、この映画のタイトルでもある「原爆の子」というのを見て、勝手に平和公園の原爆の子の像の話だと勘違いしていた。実際には、この映画は戦争が終わった後の子供たちについての映画だった。孤児収容所という所が出てきたし、原爆のせいで家族が亡くなってしまった子供、自分自身が病気になってしまった子供、この映画は子供がとても重要なキーワードだろう。特に最後のシーンでの飛行機を見た大人と子供の反応の違いは今の私たちに言えることだと思う。大人は複雑そうな顔で飛行機を見ているのに対し、子供は飛行機を見て無邪気に喜んでいたので、何も知らないと言うのは恐ろしいなとその場面を見て思った。小学校か中学校の時の平和学習で実際に戦争・原爆を体験した人の話を生で聞いたことがあるが、本当に一生懸命話をしてくれたことをよく覚えている。話には熱がこもっていて、学校の先生が話しするよりも重く、説得力があった。これから戦争を体験していない人ばかりになっていくうえで、どのように次に伝えていくか重要になっていくと思った。」（ｆ３）

「自分は、広島生まれの広島育ちだが、この映画（『原爆の子』）の広島の風景は全然見覚えがない。画面でわかるのは原爆ドームだけである。岩さんが住んでいるのは、たぶん原爆ドームに近いようだから元保川の川べりだろうし、友達の森川さんの家は裁判所の近くといっていたからやはり基町か幟町あたりだろうが、今の基町や平和公園とはまったく似ても似つかぬ場所だ。原爆で破壊された原爆ドームが破壊の象徴として５０数年後の今日まで当時の姿のまま残り、他の町並みがすっかり変わったことに不思議な感じを覚える。この映画を見なかったら自分は戦後の広島も全然知らなかったままだったのだと思った。平吉が泳ぐときに飛び込んでいた萬代橋は何か聞き覚えがあるなと思ったら、祖母の家(住吉町)のすぐ近くの橋だった。そこでその橋が現在どうなっているかとちょっと見に出かけた。昭和５６年に老朽化のために架け替えられたとのことで橋も橋から眺める光景も映画とはまったく異なっている。河岸はきれいに整備されベンチも置かれてまったく映画の面影などない。平和公園も手前のビルのために全然見えず、一つ上流の平和大橋とその向こうのリーガロイヤルホテルがはっきりと見えた。しかし橋の袂には“原爆の時の熱線をさえぎった欄干がその形を影として残した。アスファルトの上には欄干の柱と一番下の鉄棒の影と、その時歩いていた人の影や荷車、リヤカーの影が残っていた”との説明文が米軍撮影の写真とともに掲示され、映画で見た橋の親柱も保存されていた。僕は何気なく通り

過ぎていた場所にも原爆の被害が及んでいたのにビックリし、こうした保存がなければ原爆の記憶も風化が早まるのではないかと思った。映画のロケの時は熱線の影はもうなくなっていたのだろうか。」（ｍ６）

この学生は、映画で描かれる当時の広島の風景への違和感から、実際に萬代橋に出かけ、当時と現在の変貌を語っている。ただ橋の袂には被爆当時の説明がきちんと掲示されており、「映画で見た橋の親柱」も保存されていたことを確認している。映画をみて感想レポートを書くことを要請した私としては、映画をみることから、いわば自発的にというか、ごく自然なかたちで、「何かを確かめよう」とする具体的な営みを学生たちが行っていたことは、興味深いとともに、うれしいことだ。なぜなら、この男子学生は「何気なく通りすぎていた」自分の姿を反省し、被爆の痕跡を保存することの意義を語ることで、自らの暮らしの中へ、あらためて「ヒロシマ」というできごとを持ち込もうとしていると、感想の語りから読みとることができるからである。

そして、こうした実体験を想起し、自らの「ヒロシマ」理解やこの問題に対してとってしまっている普段の“距離”への反省は、『はだしのゲン』への感想に多く見られる。以下のあげる感想では、『はだしのゲン』を改めて見たことから触発され、「私の町」である己斐をめぐり自らが聞いた当時の記憶、そして広島という街への思いへと語る位相が変わっていく。映画の感想から、即座に平和をめぐる一般的な主張へ至るのではない。「私の町」と語っているように、彼が普段暮らしている「いま、ここ」を通過したうえで、より一般的な主張へ至っている。この「いま、ここ」を通過するという営みは、極めて重要なものであろう。

「「はだしのゲン」は小学生の頃からマンガやアニメでよく見ていた。児童館にもビデオなどがあったし、小学校の図書館には原爆に関する本がたくさんあった。広島の小学校ではどこの小学校でも原爆に関する行事はあったと思うし、広島の小学生は何らかの形で原爆という歴史に関わってきたと思う。私の小学校では、原爆に対しての思いが強いらしく、毎年、春の遠足では原爆ドームまで歩いていくという恒例の行事があった。６年生が下級生の手を引き、原爆ドームの説明をしたりした。希望を出せば、原爆資料館などにも行けたし、被爆者の演説も毎年のように聞かせてもらっていた。被爆者の方々はそれぞれに想いを持っていたが、皆に共通して、「戦争はイケナイ！戦争をするような未来にするな！戦争をするような大人にはなるな！！」と言っていた。親・兄弟を亡くした人、今でも後遺症に悩まされる人、中には両足を失い車椅子に乗ってまで来てくれた人もいた。わたしも小さいながらに戦争の恐ろしさ、残忍さ、酷さに涙を流したのを覚えている。この「はだしのゲン」という映画は、とてもグロテスクで小学校の時にはじめてみたときは、気持ちの悪い映画だという印象しかなかった。しかし、中学校や高校で見たときは、えらく感動したし、戦争がどのようなものかを小さな子供でも分かるように、非常に簡単に出来ていると感じた。今回、「はだしのゲン」を見ての、素直な感想は、単純な事だが、戦争とはこの世から無くさなくてはならないものであるということだ。……私の町の己斐という町は、爆心地から比較的離れているところにある。そのため、被爆した人々が水を求めてやってきたりしたといわれている。親・兄弟をなくした人々が逃げてきたとも聞かされていた。

丁度、被爆した人々を治療・処理したのが、私の通った小学校だとも聞かされたことがある。小学校の中には、慰霊碑もあり、夏休みには被爆者を悼む式も開かれていた。こうした行事を、毎年のように繰り返す事により、広島という街は原爆に対する想いを忘れずにいられるのだと思う。広島という街は、戦争というものは親から子へと色々な情報を伝えていくものでもあり、色々な人に教えてもらえる街であると思う。街のいたる所に平和を謳う看板や垂れ幕がたくさんある。８月６日を国民の休日にしようという運動も盛んに行われ、その意見には大賛成である。それは、他の県とは違い、被爆した街であるから出来るものなのだと思うし、広島という街が、これからも平和の発信地でありつづけて欲しい。

この映画で最も伝いたい事は、戦争が人々に与えるものは怒りや悲しみ、人々が死ぬ事に対する、心の傷だけではなく、生きる勇気や人と共に助け合いながら生きていく事であると思う。」（ｍ５）

６．批判

学生たちは、映画を見て、恐怖し、無知におどろき、忘却に苛立ち、あるいはなかば諦めながら、「ヒロシマ」をめぐる理解の多様な位相に対して、批判を語っていく。ここでは、その批判の語りをまとめておこう。

＜核を捨てようとしない現代への怒り、批判＞

「日本との戦争で“原子爆弾を落とさなかったら、戦争は終わってなかった”ということをきいたことがある。しかしそれは嘘だと思う。日本は原爆の被害を受けなくても負けていたはずだ。早く戦争を終わらせる為だったとしたら、あまりにも多くの人の命を苦しめ過ぎた。また、実験の為というのが本当なら、許すことはできない。アメリカをはじめとする国々がその苦しみをまた生もうとしている。」（ｆ１）

「何日か前にアメリカが臨界前核実験をしたと報道されました。しかし日本のニュースはアフガニスタンの戦争の方が大事だったみたいでほんの数分しかやりませんでした。広島では核実験をやらない期間を数えていた時計がリセットされました。その報道を聞いて、やはり広島で育ってきた私は、何か自分でも何かわからないようなものがこみ上げてきました。残念という言葉では軽すぎるような何かでした。」（ｆ９）

「最近、また核戦争が起きそうなニュースをよく耳にする。日本も他人事ではない距離にいる。戦争の悲しみ、核兵器の恐ろしさを知っている人は世界にたくさんいる。戦争になって欲しくないという多くの願いはどこにいくのだろうか。戦争反対の声は指揮をとる人間に届くのか。戦争を起こそうとする人間の肉親や本人が戦争の恐怖を体験しないと戦争はなくならないのだろうか。広島に生まれ育った者として、戦争のない地球になってほしいと願う。」（ｆ１）

繰り返される核実験への怒り。彼らがそれを語ろうとするとき、「やはり広島で育ってき

た私」「広島で生まれ育った者として」というかたちで、自分自身を、今一度広島に定位することで、批判していく根拠を確認していく。一般的に反核、戦争反対を語るのではない。他ならない「広島」の住人であるからこそ、よけいにそう思うのだと。もちろん、この「広島」への定位は、彼ら現代の若者にとって、同時に大きな戸惑いのもとになっている。

次にまとめるように、自分たちが受けてきた平和教育への批判や「ヒロシマ」をどこかで避けてきた自分の姿を告白する語りがそのことを象徴している。ただ、感想を読む限り、「広島」になぜ自分を定位していくのか、そのことを納得させていく理由や情緒については、どこか空洞になっている印象を受ける。なぜ平和学習を受けなければならないのか。確かに受けてみて、意義は理解できる。しかし、受けなければならないのは、自分たちが「広島」に生まれ育ったからなのか。確かに被爆地の後継者として、事実を知る必要はわかる。でも、それだけで「ヒロシマ」を自分の暮らしのなかに普段から位置づけていく理由になるのだろうか。この推論の堂々巡りの中心に、「なぜヒロシマを他でもない、この私が受け継いでいく必要があるのだろうか」という問いがあり、一人一人が納得できる答えが空洞になっているからこそ、さまざまな批判が書きしるされていくのである。

＜平和教育・平和学習への批判へ＞

「広島は原子爆弾の被害にあっているから、平和学習など頻繁に学校などで行われている。しかし、他県ではそれほど平和学習は行われていないようなことを他県にいる友達に聞いた。同じ国にいても戦争についての考え方が違うのだから、世界に平和を訴えてもなかなか通じるはずがない。」（ｆ１）

「少なくとも、平和教育というものは戦争によってひどい被害にあった土地なら当然に行われている、というような簡単なものではないというのはこの映画を見てあらためて思い知らされた。……少なくとも、広島には「原爆」というものの資料など平和について考えるための助けになるものが、それは不幸な事実ではあったのだが、確かに存在している。どうせ不幸だったのなら・・・そんな言い方をするのは自分にとって原爆というものが他人であるからなのだろうが、それでも、せめてまず私自身が平和について考えるために活用したいと思う。」（ｍ１）

「小学生の頃から平和学習を繰り返してきた。中学生まで８月６日が全校登校日で、黙祷して８月６日の原爆が投下されたということを聞かされた。高校生の時は、呉の学校だったため、８月６日ではなく、忘れてしまったが、呉空襲があった日に平和学習をしていた。呉は広島の原爆ではなく、呉での空襲のほうに重点をおいていた。どっちにしろ、あまり覚えていない。今回が初めて原爆について勉強しているといえる。

本当になにも知らない。なぜ原爆が広島に落とされたのか、その後の復興はどのように行われたのか…とかいろいろのことを私は知らない。平和学習なんて原爆の悲惨さを教えるだけでほかのことはなにも教えてくれなかった。」（ｆ７）

「私が初めて‘はだしのゲン’を見たのは小学生の頃だったと思う。平和教育と言う授

業で、広島の原爆の事を教えられた時このビデオを見た。しかし、これはきっと広島限定の平和教育じゃないかなと思う。私は小学校高学年の時３年間、関東に住んでいたけどそこでの平和教育の広島と言うのは結構いい加減なものだったかなと感じた。私達は広島に生まれ、育ったから原爆や戦争と言った話題は小さな頃から身近にあり、色々なことを教えられてきたけれどやはり関東に行くと戦争の事は教えても広島の事はまるで違う国の事のように皆、無知で関心も低かった。(それは、小学生だったからと言うのもあるかもしれないけれど‥。)……この話が悪いとは言わないし、内容も嘘ではないだろうから平和教育で見るのは良いと思うけど後の説明をきちんとしないと小さな子供は第二次大戦の善悪を間違えかねないなと思った。広島に原爆が落ちて人が多く死んだ、後にも多くの後遺症を残した。しかこの話は語っていない。なぜアメリカは落としたのか、日本はアメリカや他の国々に何をしたのかもいっしょに語らなければこの話はただの偽善になってしまう。内容に関しては、すごく戦争の辛さがわかる。……私はこの夏にアメリカのパールハーバーと言う映画を見た。この映画はその名の通り、アメリカの日本における真珠湾攻撃を題材にしたラブストーリーだ。最初見たいと思ったきっかけはただ単に主演の男優が好きだからと言うものだったけど、いざ日本で映画が公開し始めると前評判は良かったのにも関わらず戦争をアメリカ側の視点から描いているから面白くないと言われ始めた。製作者側の監督は日本公開に合わせて時差などからアメリカとは違う日にちなどの字幕を直したり、この映画は戦争映画ではなく一つのラブストーリーとして見てほしいと言ったりと必至だった。私自身もラブストーリーとして見るつもりだったけれど、見て行く内にただのラブストーリーとは思えなくなってきた。日本人による真珠湾攻撃は原爆攻撃に勝るとも劣らないものだったのではないだろうか。はだしのゲンの作者は体験をもとに、今もなお苦しみの中にある広島の姿を小さな子供たちに知ってほしかったのかもしれない、広島の姿や原爆の歴史的事実を教えたいのかもしれない、しかし結局この話ではそれしか、戦争における事実の半分も伝えることが出来ないのでは‥と思う。……終戦から 60 年たった今、その時代を知る人は年々減りあと何年かしたら戦時中生きた人はいなくなってしまう中、こう言う事実を語った話も必要なのかもしれない。しかし加害と被害の記憶は正しく語り継がれていかなければならない。そして私たちは今生きて生活している事を当たり前とせず、平凡な毎日を送れることを感謝しなければならないと思う。その上で戦争の記憶やテロに少しでも関心を持っていくことが必要だ。」(ｍ５)

＜大人への批判→自己批判へ＞

「戦争は本当に損することばかりあっても得することは一つもない。そんな感じが無性にしてならない。戦争が終われば「ハイ！そこですべての戦争は終わり！」ということになればいいが、そんな事は決してない。地雷や不発弾は未だに埋まっていてそれに怯えながら暮らす人もいれば、原爆症のように後遺症に苦しむ人々がいたり、体の一部を失った人もいる。一番つらいのが一生消えないであろう心の傷である。戦争を体験した人ならすべての人が持っているであるだろうと思うこの傷だけは絶対消えないと思う。(戦争を起こす政府とか上の人には分からないだろう)

自分たち・現代っ子は戦争を知らずに育ったが、戦争というものがどれだけ悲惨なもの

でどれだけ非道な事をしているかというのを後世に伝えていく義務がある。とくに広島・長崎の子どもらはしっかり実際にあったことに目をそらさずに見ておくべきだ。平和記念公園にある資料館のロウ人形が怖いとか、公園内で写真撮ったら霊が写るとかそんな事は関係ない。戦争などを起こさないようにするには本当にあった歴史を見せる・教えることが一番だと思う。今でも平和公園や大久野島（毒ガス兵器を造っていた島）では語部として何人かの人が実際にあったこと自分が体験した戦争を語ってくれている。しかし、その人たちは年を多くとられ、語られなくなるときがくる。そんな時のためにも自分たちがよく理解し学んでおかなければならないと私は思う。」（ｍ７）

＜迷い、戸惑い、苛立ちの自己批判から現代の自分たちへの批判へ＞

「ヒロシマ」を頭のどこかで、避けてきた自分の姿。原爆映画を見る恐怖やしんどさ、今もし、戦争になったら自分はどうしているのか、矛盾だらけの自分の姿など、学生たちは、＜外＞の社会や自分たちが受けてきた平和教育への批判にとどまらず、さらに自らの＜内＞になにがあるのかを覗き込もうとする。私は、特に自分の姿を反省してください、というような指示を出したことはない。ただ映画を見て、その詳細を読み解いたり、感じたところを書くようにと指示しただけであった。しかし多くの感想レポートには、自らの＜内＞を覗き込み、そこにある「ヒロシマ」と自分との距離に気づき、語ろうとする。それは、やはり先に述べたような「広島」への定位を書いてはみるものの、そう簡単にはできないことへの戸惑いであり、なんとも言いようのない情緒のあらわれではないだろうか。『原爆の子』『ひろしま』などの映像に、あらためて真っ直ぐに向き合った時、普段はそれ以上問い直そうとはしない「ヒロシマ」と自分との距離に、おもわず気づかされ、気づいてしまった自分の姿に苛立ち、不安になり、あるいは冷静に見つめている語りが多く見られたのである。

「初めて「ひろしま」を見ました。すごくショックを受けました。広島に住んでいながら私は、本当の広島を知りませんでした。両親からは色々な話を聞いたことはあります。叔母の背中にケロイドがあるとか、お祖母さんは原爆の後、似島で従軍看護をしていたとか聞いていました。それに平和記念館にも過去に１～２回しか入ったことがありません。たぶん頭のどこかで意識的に避けていたような気がします。そしてこういう機会がなかったら一生「ひろしま」を見なかったと思います。」（ｆ９）

「このような広島関係の映画はたくさんあるものなんだなぁと思いました。けれど今までこんな実写を見たことはなかったです。だから連続してこんなに見るのは結構しんどかったです。感情移入というか、何だかとても胸が苦しくなるのです。結果はどの映画も悲惨だし。自分が今住んでいるこの場所でこんな出来事が起こったなんて信じられない。見れば見るほど心にぽっかり穴があいたみたいな、切なくて苦しくてたまらない。広島のことはきちんと考えなくてはいけないのだろうけど、しばらくはもうこんな映画はみたくないです。こんな風に思ってはだめなのでしょうか。

戦争によって親を失って、孤児になってしまった子供たち。どんな思いで生きていたの

だろう。身寄りもなく、頼る人もいなくなる恐さと言うのはそうとうなものだろう。私だってもう二十歳になったけどもし今両親がいなくなったら、どうしていいか分からない。それなのにこの時代には小さい子供が一人で生きていた。それとは別に、原爆によって子供が生めなくなった女の人。それでも生きてるだけ幸せなんて思える彼女たちの強さに関心する。どうしてそんなにも強く生きていけるのだろう。今はほしいものはたいてい手に入るし、食べるものにも困らない。着るものだって、暖かい寝る場所だってある。時代は変わったとはいえ、今に生まれた私たちは幸せなのだろう。もう何を書いていいのか分からない。何を言っても綺麗事のように思える。何も知らないから言えるだけのようにも思うし。自分の考えていることは、偽善なのじゃないかとさえ思う。」（ｆ６）

「もし今戦争が起きてまた広島に原爆が落ちるとすれば私は戦地に行っているのだろうか。もし自分が被爆をしていれば当時の人たちのように活発に生きようと思っただろうか。ヒロシマに生まれ、ヒロシマで育ち、ヒロシマを見てきた戦争を知らないが戦争の怖さを知っている私たちだが、実際は何も知らないのだろうと思う。戦争が起きても何もできてないというよりは何もしていない自分たちがいる。矛盾だらけの自分がいる。」（ｍ７）

そして自分の＜内＞を反芻する批判は、今を生きる「自分たち」への批判へとつながっていく。

「小学生の頃、必ずどっかのクラスに全巻あって、図書室においてある「はだしのげん」は唯一のマンガだったため必ず誰かが借りていて全巻がそれていることはほとんどないぐらい大人気だった。これはただ、マンガだったからだ。

原作は見るのもいやなぐらい、見ただけで吐き気がしそうなぐらい私は嫌いなものであった。だから今回のビデオをみるのも一番最後にした。……広島県民であれば一度はあたり前に見る「はだしのゲン」の原作本。子供が読むと私のように、見るだけで気分が悪くなる子と平気は子とにわかれるだろう。あれはすこしやりすぎだ…。

しかし、あれは子供の視点からの戦争・原爆である。一番の被害者である子供の視点からのものである。原爆投下時、投下後での広島の子供達の姿である。……第二次世界大戦で子供だった人達が今大人となっているのだから、一番理解している大人でなければならないはずが、小泉総理大臣の自衛隊を軍隊にするという考えを支持しているかたちとなっている。アフガニスタンにも自衛隊を出航させるなど、しかも、自衛隊の派遣は呉からも出航した。それは異様な風景で、笑顔または涙で見送る家族、一方で派遣に反対している人がいた。小泉総理は戦争の恐ろしさを身をもって体験したとは思えないような行動である。そんな大人が多くなってしまった現在の日本で、若者に戦争の理解を求めるのは難しい。私の友達の言った「自分の所で戦争がないのなら、別に戦争が起きてもいい。」という言葉は当たり前なのかもしれない。誰もがそう思っているとはいえないが、この友達はまだましなほうかもしれない。友達は自分の意見を口にしているだけましである。若者は「自分の国でなかったらいい」とも、何も感じていない人が多いだろう。このままでは日本は危険である。

「はだしのゲン」もその他の原爆・戦争映画も戦争が二度と起こらないようにという願

いを込まれているのだろうが、今の若者には届いていないだろう。それはリアリティが感じないからだ。広島は特にそうなのではないのだろうか。広島のファッション雑誌のアンケートにこんな質問があった。「広島はおもしろいですか？」NO と答えた人が 80%。多くの若者は、広島という都市に不満を感じ、広島県外にでたいと考えている。これでは、原爆・戦争に関心を持って、世界に平和を訴えよう！なんて考えるはもうすぐ消えて行くだろう。

世界ではじめての原爆の被害にあった広島が世界に原爆の恐ろしさを教える。これが広島から消えるのも時間の問題である。」（ｆ７）

「この映画を観終わって、自分は一つの単純な疑問を感じ、中学時代の教科書を屋根裏から引っ張り出し手に取りました。それは「何故日本とアメリカの間に戦争が起こったのか？」と言う事です。普通に考えれば常識、下手をすると広島に住んでいる小学生でも知っているような事かもしれませんが、歴史が好きなわけではなかったし高校では世界史を専攻したのではっきりとした記憶は無かったのです。…（中略）…まわりの友達にアメリカと日本との戦争の理由を聞いてみても、そういった答えを知るひとはほとんどいませんでした。つまり少なくとも自分と同世代の周りの人間の多くは、自分と同じようにあの戦争の根本的な原因を詳しく理解していないのです。これは常識的に考えて少し異常な事ではないでしょうか？平和学習とか原爆とかの問題ではなく、その原爆を落とさなければならなくなったほどの戦争、その戦争が起こらざるをえなくなった理由を自分達はわかっていなかったのです。もしかしたら自分が教科書で調べた事は表面的なことで、裏には国際的な世界情勢、以前からのアメリカとの外交情勢などが原因なのかもしれません。日本史とか世界史とか、平和学習とか義務教育とかそれ以前に、真っ先に自分達はこの事を知っておかなければならないのではないでしょうか。その事は戦争を体験していない自分達にとって最低限の基礎知識であり、原爆の問題について考える上で絶対必要な事だと自分は思います。」（ｍ３）

７．違和感そして映画への提言、映画を見たことへの評価

他にも映画それ自体への違和感が語られている。『原爆の子』『ひろしま』はともに１９５０年代に製作されており、その白黒映像の古さに学生は端的に違和感を表明していく。また、被爆映像やストーリーのワンパターンを指摘するものもあり、被爆映像にかぶさっていくＢＧＭに違和感を表明するものもある。

「まだヒロシマについてのビデオを見て、レポートを書くのは二回目だが、今回は苦戦した。感想がとても書きにくいのだ。この「ヒロシマ」という映画は記録映画みたいな映画だった。なぜなら、この映画には何回か黒い切れ目があり、全部とは言わないが不自然だった。私の考えすぎかもしれないが、何かを隠すかのように黒い切れ目が長かったり、短かったりしていた。長さが不規則だったからだ。そして、この映画はいろんな事に手を出しすぎだ。いろんな事が中途半端に終わっている気がした。白血病の女の子はどうなったとか、兄とはぐれた妹はどうなったとか、映画を見ていくと気になるのだ。しかも、一

画を見ただけで、もしレポートを書くことがなかったら映画を見終わった後のなんだかよく分からないという感想だけで終わってしまっていただろうと思う。」（ｆ４）

他方、映画を見たことを評価し、さらには「ヒロシマ」を今の世代に伝えていくうえで、どのような映像にすべきかをめぐり提言するものもあった。学生たちは、一様に映画を見た経験を評価しているようだ。多くの学生が告白しているように、一度にまとめて原爆をテーマにした映画を見ることは、たいへんしんどく、つらいものだろう。しかし、これまで整理してきた彼らの語りに見られるように、感想を書くなかで、「ヒロシマ」と自分との距離そこにはらまれているさまざまな問題と向き合うことができたことを評価しているのである。

「自分は今回この「ひろしま」と言う映画を観た事で広島、戦争、原爆についていろいろな問題に触れ、多くの事に気付かされたと思います。また、映画を見るということ自体にも大きな自己変革につながったとのではないかと感じました。」（ｍ３）

＜「ヒロシマ」映画のあり方への提言＞

「作品の内容と同じくらい「作品の印象」と言うものが重要なのかもしれないということです。「印象」というもの次第で、自分の中でのその作品の価値は大きく異なります。それは決してポジティブな終わり方であるべきだとか、感動が必要だとかと言うことを言っているのではありません。救いようのないラストでも強烈な印象を与えてくれる作品はたくさんあります、ましてや原爆映画においてハッピーエンドなど存在しないし、そんなものは必要ありません。うまく言えませんが、その映画がもつ「力」とでも言うのでしょうか、その人の観た人の価値観を揺さぶるような力が、原爆を題材にした作品には必要なのではないかと思います。戦争を知らない世代の人間に戦争の恐ろしさや悲劇を伝えるのは簡単なことではないとは思います。何本か資料映画を観たり、数度平和学習を行った程度でそれが伝わるようなものなら、戦争はとっくになくなっているでしょう。そんな中、少しでも今の世代の人に、戦争の真実を理解してもらうために、こういった「力」のある作品が必要なのではないかと思います。

しかし一つ不安なのは、こういった当時の作品を見て、今の世代の人は本当に感情移入して観ることができるのかということです。他の古い年代の資料映画を観たときにも思ったのですが、そういった作品の多くは自分たちの生まれる何十年も前に作られた映画です。当然白黒、入り込みにくいのも事実でしょう。撮影技術や「見せ方」も、世代に合わせたものが必要なのではないでしょうか。そういった問題を解消するための道がきっとあると思います。」（ｍ３）

あとは個別に映画をめぐり興味深い解釈をしている語りをあげておきたい。

＜『原爆の子』タイトルへの解釈＞

「「戦争の馬鹿たれが」と、爺さんはポツリとしかしはき捨てるように言った。これがすべての人が思っていたことだと私は思った。そして子の映画を作った人もこれがいいたかったのだとも思う。そしてこの言葉を言ったのは爺さんだ。そして爺さんは死んでしまうわけだが、その直前に自分の身体をみんなに見てもらってくれと言う。ここで原爆の悲惨さをみんなに知って欲しいということも主張している。重要なことは、すなわち製作者が言いたかったことを爺さんが言っている。と考えてみると、この映画の主役は爺さんだったのだ。と私は思ってみた。

それでもこの映画の題名が「原爆の子」だったのはなぜだったのかを考えてみた。その結果、私の考えでは、原爆によって完全に崩壊してしまった広島。つまり広島は０歳の状態に戻ってしまったのだ。ここからの成長、広島という街の再生(成長)を人間の赤ん坊から子供、そして大人へといった成長。といったものとシンクロさせているのではないか。まだ見ぬ未来へといった意味合いもあったのではないか。という１つの結論に私なりに達したわけである。」（ｍ８）

＜『原爆の子』主人公女性やドラマ部分への批判＞

『原爆の子』では、子どもたちを訪ねていくタカコという女性の主人公に対して、違和感を表明する感想が特徴的であった。女性が語る広島弁のぎこちなさ、被爆して貧しい暮らしを余儀なくされている元使用人の孫を引き取ろうとする行為への反発などが、その内容となっている。

「主人公の人が原爆の足跡を辿っているがどことなくぎこちないのは原爆を受けた人にもかかわらずそのように見えないせいだろう。これならなまじ被爆者という設定よりも断然関係のない人がやってきて（それこそ外人でも）追っていく、というほうがしっくりする。普段映画を見るときはその人の状況に立って見てしまうことが多い私にとってどのように見たらいいのか分からなかった。被爆者の立場？傍観者の立場？他人の立場？どれにも当てはまり、どれにも当てはまらない彼女はどうなのだろうか。題名は「原爆の子」とあるのにこれではどうだろう。残念だ。

そういった訳で私にはこの映画の感想が「書けない」のである。殺伐としたものが残っただけなのである。広島人というのはある程度原爆の恐怖を知らなくても知っているみたいなところがある。小さい頃から習っていたということもあるだろうがここに生まれたというだけで生まれるイメージがある。それを踏まえて言うならばこの映画はなんだかそんなイメージに乏しい気がする。まるで知らない人が作ったように。

「何をえらそうに」と思われるような感想だが、実際そうなのである。彼女の偽善者振りといい、周りの人たちの異様な明るさといい。それともこれが事実なのだろうか。私の想像が誇張されたに過ぎないのだろうか。

ただ言えるのは、原爆後の取り戻した明るさと残る恐怖が続いていたということだ。そしてそれを忘れてはいけないということ（事実資料館があんなに早くできたとは知らなかった）であろう。広島の人は他の県に比べて戦争や核についての恐怖を知っているのだから、早く平和になって欲しいものである。核実験やＢ型戦闘機（原爆を落としたのはB29

戦闘機）が出るたびに起こるこの恐怖は広島人ならではないだろうか。こんな恐怖はないに限るのだから。」（ｆ８）

「主演の石川先生(乙羽信子)や岩吉さんの広島弁はまあまあだと思うが、脇役の人の広島弁にはたまに違和感を覚えることが会った。それに難しいと思うが、子役の演技がオーバーアクション気味でうそ臭く感じた。音楽もクライマックスでのいかにもクライマックスシーンという感じの音楽はかえって耳障りだった。脚本も石川先生が尋ねたときにちょうど父親が死亡してお悔やみを言う先生に悔やみなんかと怒鳴られるシーンや、最後の一人を訪ねたらその晩にちょうどお嫁入りだったとか、孫の太郎を先生に預けたその晩に岩吉さんのバラックが火事を起こして本人が死んでしまうとかの話はちょっとわざとらしいと感じた。新生学園のシーンも、職員の話が説明的過ぎて子供たちが働いてる場面との違和感を感じた。……この映画で印象に残るのは、ドラマティックな場面ではなく石川先生の友達の森川さんが「自分が産めないからせめて人の手伝いを」というシーンや原爆症のため死にそうな教え子が「両親と原爆犠牲者のために祈っている。いつまでも平和が続くように祈っている」という場面である。おそらく日本人のそして広島・長崎の人の多くが同じように感じるのではないだろうか。」（ｍ６）

＜『はだしのゲン』アニメへの確実な評価＞

また映画への感想で特徴的であったのは、やはり『はだしのゲン』への評価であろう。原作である漫画は、彼ら学生たちにとって、小中学校で原爆を考えていく基本であったからだ。もちろん学生たちは、この作品に対して高く評価をする者もあれば、嫌いだ、いやだ、と否定的な見解を述べている者もいる。しかしいずれにしても、平和教育における、一つの“教典”であることには間違いがなく、この作品が戦後、平和教育、人々の「ヒロシマ」理解、原爆イメージなどに与えてきた大きな影響を解読することは、重要な課題なのである。感想レポートを整理する最後に、『はだしのゲン』アニメへの評価を列挙しておきたい。

「「はだしのゲン」という物語は、誰しも１回は見たことのある作品だ。しかし、私は小さい頃に見たので、今見たこの作品の考え方や感じ方が昔とは違うように感じた。原爆に負けることなく力強く生きているゲンを見ていてすごくたくましく見えたことがすごく心象に残っている。」（ｆ２）

「この作品（『はだしのゲン』）を見て１番感じたり思ったことは、戦争とは家族やたくさんの大切なものを壊し傷つけていくものだと実感した。この世の中で１番あってはいけないことが戦争だと思う。戦争は民間人を巻き込み、結果として人を傷つけることしかない。嬉しいや楽しいや幸せ、などと感じる人間はまずいない。広島で起きたこの悲劇を無駄にしてはいけないと思う。他の国の人たちは戦争の悲惨さをまだ分かっていないような気がする。「はだしのゲン」という作品は小さい子たちでもとっても見やすくなっていると思うので、たくさんの人たちにぜひ見て欲しいと思う作品だ。」（ｆ２）

「原爆映画だとだとわかっているとある程度ストーリーが予測できてしまうことは原爆映画にとって良いことではないと思う。どんなに罪のない平和な暮らしをしている人たちも（広島が、いくら大本営が置かれていたとはいえ市民のほとんどは非戦闘員である）八月六日の八時十五分にはそしてその後も悲惨な目に会うことがわかっているからだ。……そういう見る前の重い気分は「はだしのゲン」のプロローグを見たとき大分楽になった。主人公である「中岡元」のお父さんは「麦は寒い厳しい冬に芽を出し何回も踏まれ、大地にしっかり根を張り霜や風雪に負けずにまっすぐ伸び穂を実らせる」と子供達に言い聞かせる。そしてそれがこの映画のテーマだと見ている人にもわかるからだ。このお父さんはこの戦争にも反対で非国民と言われようとも「人の命を守るのが勇気でありそのための戦いが本当の戦い」だとゲンに教える。そしてこれがまたこの映画でいいたいことだということがわかる。……一つちょっと気になったのは、ゲンとお母さんの着物がいつまでもきれいなままで割烹着が真っ白なことだ。他の人の服や皮膚がぼろぼろなので奇妙な気がした。」（ｍ６）

「この『はだしのゲン』からは、原子爆弾による悲惨さや惨たらしさをヒシヒシと感じる。私は小学生の時、学校の図書室ではだしのゲンを読んでいた。内容はほとんどと言っていい位に覚えてはいなかったが、原爆についての知識を持ち始めたのがあの頃であったことは確かである。今回アニメ映画『はだしのゲン』を観たが、他の原爆を題材にした映画よりもリラックスして観れた。他の映画は、観る前から少し気難しい気分になり、気張っていて、なんだか肩に力が入っていたように思う。この作品はアニメ映画ということで、小学生に広島に原爆が投下されたことを教えるのに、授業の一環としてこの映画を鑑賞させることも多いと聞いたが、やはり小学生にも理解しやすいような内容なので、子ども心に返ったような気持ちで鑑賞できたのだろう。……その理由の１つには、この映画がアニメであって実写ではないから、映像やストーリーの内容がリアルには伝わらないということがある。しかしこれだけでは不十分である。まず、重苦しく感じるはずの原爆を題材とした内容が、アニメとしての登場人物の描き方自体（彼らの表情、動作、声、話し方など）によって、打ち消される仕組みになっている。……た、この映画の効果音も他の映画とは異なっていた。他の映画では、重たい原爆というテーマと同様に BGM も暗くて、悲愴感に満ちたものであった。しかしこの映画では初めて、明るくておちゃらけた感じの遊び心溢れる効果音が使用されていた。」（ｍ５）

「この作品が何年に作られたか私は知らないがかなり古典的な表現がいくらかあるように思える。あげられるものとして、ゲンとシンジが母親のために鯉を盗みに行き家主の爺さんに見つかり怒られる場面だ。爺さんに殴られるところで大きな雷が落ちる。そして家主が盗んだわけを知り、怒りを静めると今まで荒れていた空が晴れてくる。爺さんの心境の変化を空の変化で表現するという古典的な表現方法が見られる。他にも、ゲン達がミルクを買うためにうじのわいている青年の身の回りの世話をしている家にいた意地の悪そうな女性がいたが、この女性の顔は、目は細く、鋭くなっていて、顎は尖っていた。印象からの意地の悪そうだということが分かるようにしてある。これらの古典的な手法によって、

見る側にとても親切なつくりになっているように思えた。……運命の原爆投下。投下する前のアメリカ軍人が描かれているが、その軍人には目玉が描かれていなかったし、人間の暖かみというものがほとんど感じられないような描写だった。この辺に私はやはりこの投下した軍人は人間ではないという風に思われているのではないだろうかということを感じた。……原爆によって死んでいく人々の描写は中学生の時に見たときはあまり何も思わなかったが、今見てみるととても衝撃的だった。陸軍が死体を処理しているところで死体がもげたり、陸軍兵が原爆症で死んだりするシーンでは、まさに死がそこにある。死というものが身近にあるということが分かる。これが戦争であるとわからせるには説得力十分だと思う。……最後に広島の町に麦の芽が出てきて、ゲンの頭に髪が生えてくる。ゲンの髪の毛の再生とともに広島の町の再生も明示されている。ゲンの頭と広島の町ともに不可能と思われていた再生を果たしていき今の広島に至った。原爆症により死んだ陸軍兵のようになると思われていたゲン(中沢啓二)も今現在無事にやっているようだし、共に生命力、再生力人並みはずれていたことのあらわれだろうと私は思う。ゲン＝広島という位置付けなのだろう。」（ｍ８）

「子供向けに製作された原爆アニメーションなだけに、幼い頃見たことがあるようなないような曖昧な記憶のもとで作品を見た。母に聞いてみるとやはり小学生の頃見たことがあるそうだが、話の内容はほとんど憶えていなかった。今回の５作品の締めでこの「はだしのゲン」を見たことがとてもいい方向に作用したような気がする。……これはもっとも多くの内容が凝縮された作品であったように思う。……原爆作品の原点だなと感じた。この作品のように大人にも子供にも幅広く受け入れられるものが長く語り継がれていくのだろうなと思った。……今まで見た４本の作品にはあまり見られなかった前向きな印象を受けた。子供ならではの明るいキャラクターが暗い雰囲気を吹き飛ばしている、そんな感じがした。……こういった子供らしい素直な行動が、戦争・原爆といった重々しいテーマを背景に背負いながらも見る者に「生きる」という力強さを感じさせるのではないだろうか。しかしそう感じるのと同時に、その思いをひっくり返してみると戦争の残酷さがあらわになるような気がする。子供であろうが大人であろうが男であろうが女であろうが人間であろうが動物であろうがおかまいなしにまき込んで行く戦争の残酷さ、そのすべてを一瞬で灰にしてしまう原子爆弾の恐ろしさ。はだしのゲンのストーリーは憶えていなかったが、幼い頃目にした画像をかすかにこの作品のイメージとして、そして戦争というもののイメージとして持っていた。原爆が投下され、人も馬も犬も猫も目玉が飛び出し皮膚が融けただれていく…。それが戦争・原爆イコール恐ろしいという図式を幼い私の中に埋め込んだ。はじめはその強烈な印象のおかげでなかなかこの作品を見る気にはなれなかった。いくら友達に「アニメだし見やすいよ。怖くないよ。」と言われても昔受けた一種のカルチャーショックが邪魔をしていた。やっとの思いで見てみると、なるほどそれほどでもなかった。……やはり主人公が子供だと響いてくるものが大きいような気がする。いい意味で話が単純だからであろうか。また子供をこんなつらい目に合わせているということに心が痛むからであろうか。同じように動物が主人公的な存在感の作品もすんなりと受け入れられる。昔見た「クロがいた夏」という猫を中心とした作品が印象に残っている。無知な子供や罪なき動物が犠牲になる姿は胸が痛かった。一ひねり加えてあって観賞後に深く考えさせら

れるというものもいいとは思うが、今こうして 50 数年後にも観賞されることを考えるとやはりこのジャンルの作品は根強い。何よりアニメーションというとっつきやすさがいい。はだしのゲンをなかなか見ることのできなかった私が言うのも矛盾しているような気がするが。どうしても暗く重いイメージで倦厭されがちな戦争・原爆作品であるが、こうした作品だと原爆作品を目にする機会の少ない県外の人にも受け入れられやすいのではないか。県外の人が原爆作品に触れる機会が少ないというのは私の想像から言っているが実際のところはどうなのだろうか。せっかく広島に生まれ育ったのだからひとつでも多く知っていないと恥ずかしいような気もしてしまう。

大学生となったこの今、幼い頃に見たこの作品が再び見られて色々考えることができてよかった。」（ｆ４）

「この映画を見て、アニメ映画はやはり見やすいと思った。簡単に見ることができて理解しやすいという意味ではなくて、気軽に見ることができるという感じだ。なぜなら、映画の終りまでしっかりと見ることができたからだ。戦争や原爆という映画は少し硬いイメージがあって重たいので、興味がないと進んで見ないだろう。でも、アニメのこの「はだしのゲン」なら、重たい戦争映画より多くの人に幅広く見てもらえる気がする。アニメだから実写では表現できないところまで絵にすることが出来る。例えば、火事の時のシーンや映画の中の死体を運ぶときの足がちぎれてしまったシーンや火傷にウジがわいていたシーンは衝撃的だった。ただ、今回改めてこの映画を見て私は見落としていたことが多かったように思う。私はストーリーもろくに覚えていなかったので、今回しっかり見てみると前見た映画の感じとは今回少し違っていた。前までは本当にアニメとしてみていたから何も思わずに見ていたんだと思う。これはアニメの難点だろう。……この映画を見終わってみると、戦争とか原爆とかの悲惨さ・むごさはもちろんとともに感じられたのは家族のあたたかさだ。だから、映画の中のストーリーとしてヒロシマに原爆が落とされたのは通過点に過ぎないような感じを受けた。……私は、自分のことで精一杯だった時代に、ゲンたちのような家族や他の人たちに一生懸命になれる人たちは絶対にいないと思っている。この映画は少し「ゲン」という少年を良い子にしすぎのような感じがした。映画を見ていても、理想のような感じで見てしまう自分がいた。

この映画には、お父さんの同じ言葉が最初と最後に 2 回出てくる。「麦は、寒い厳しい冬に芽を出して、何回も踏まれ、大地にがっしりと根を張り、霜や風雪が襲いかかってきても負けないで、まっすぐ伸び立派な穂を実らせる」という言葉だ。これは映画の中ではお父さんがゲンに言っているが、私はこの言葉は広島に住む人たちやすべての人たち、ヒロシマという都市に作者が投げかけている言葉だと思う。原爆が落とされたからといって、負けずにもっと大きくなりなさいと言われているような気がした。だから、最後は何十年も木や草が生えないだろうといわれたヒロシマの地に芽が出たところで終わっていたんだろう。今までに４本映画を見てきたが、このヒロシマの地に芽が出るということはとても大きい出来事だったことが分かった。普通に木や草が生えているのが私には普通だから、木や草が生えないことがどれだけ重要かあまり気にしたことはなかった。私は本当に平和な時代に生まれたんだと改めて感じた。」（ｆ３）

「この「はだしのゲン」という作品は、アニメで観たのは今回が初めてですが、自分の中でかなりの思い入れのある作品です。それもそのはず、広島だからかどうかはわかりませんが、原作の漫画は小学校・中学校・高校とも図書室には全巻置いていたし、実際に何十回も読んだものです。基本的に漫画が好きだからという理由もありますが、よく読みました。そして今でもこの作品こそ自分にとって、戦争と原爆について最初に考えさせてくれものだと思っています。しかしだからこそ、この映像作品である「はだしのゲン」を観るにあたって、やや抵抗がありました。それは自分の中の漫画『はだしのゲン』のイメージを崩されるかもしれないという不安が少なからずあったからです。……漫画だからこそ存在する価値、それそれすら侵食されるのではないだろうかと。しかし観終わった後、この作品に関して自分は、原作『はだしのゲン』と次元の別なモノとして「観させる力」を十分持っていると確信しました。戦争の愚かさ、原爆の恐ろしさ、生きる事の素晴らしさを、映像を通して伝えることができる素晴らしい作品だと、そう思わされたのです。映像化することによって生まれるメリットはたくさんある、原作を見た事がある人もない人にも、同じようにとは言いませんが、考えさせてくれる作品、それがこの作品を観ての感想です。……この作品の素晴らしさの一つは、「生きる事の素晴らしさ」を教えてくれる所にあると思います。」（ｍ３）

「また別の視点では、戦争に対する考え方についても考えさせられます。この作品ではあまり強調されていませんが、原作ではゲンの家族は戦争に反対する事で「非国民」と呼ばれ非難を受けます。あの時代、日本の勝利を信じ、国を信じて疑わなかった人達が多い中、そういった考えに流されずゲンの父親は戦争に反対し続けるのです。周りに流されずに自分の考えを変えないというのは本当に難しいことです。どちらが正しいのか、その事を教えてくれる人がいない中でも自分が信じる道を貫く、大切だとわかっていてもなかなかできる事ではありません。自分の知っている言葉にこういったものがあります。「何が正しいのかは、時代時代が後世の歴史に書き残す。自分達にできるのは、その中で自分の正しいと思う事を信じて生きていくことだけ…」。今の時代から見れば、結果的にゲンの父親の考えは正しかったといえますが、彼等の時代では戦争は正当化されていたのです。まわりがそうだからそうするのではなく、自分が正しいと信じる道を進む事の大切さを、この作品から学ぶ事ができるのではないでしょうか。

作中のゲンの生き方は素晴らしいです、彼はどんなに辛い事があっても挫けず強く成長していきます。まさに父に教えられた「麦」のように、強く生きていく人間の姿がそこにはあります。「人は成長する事に生きる意味がある」とよく言われますが、人は失敗や辛い事無しに成長することはありません。だからこそ、それらをバネにできるかどうかが大切なのです。ゲンの生き方に学び、教えられる事は、時代が変わってもきっと変わらないのではないでしょうか。……また最後に、原作『はだしのゲン』には、アニメーションには含まれていない、日本の古い慣習や考え方による反省すべき多くの事例が込められています。この映像作品としての「はだしのゲン」を観る事で原作を手に取り、教科書では決して学べない多くの事を多くの人が得、少しでも多くの人の戦争への理解が深まり広まっていく事を願います。」（ｍ３）